

新庁舎落成記念特集号



東京高裁広報・東京地裁広報

昭和59年8月1日



(東面遠景)



(南面ディテール)

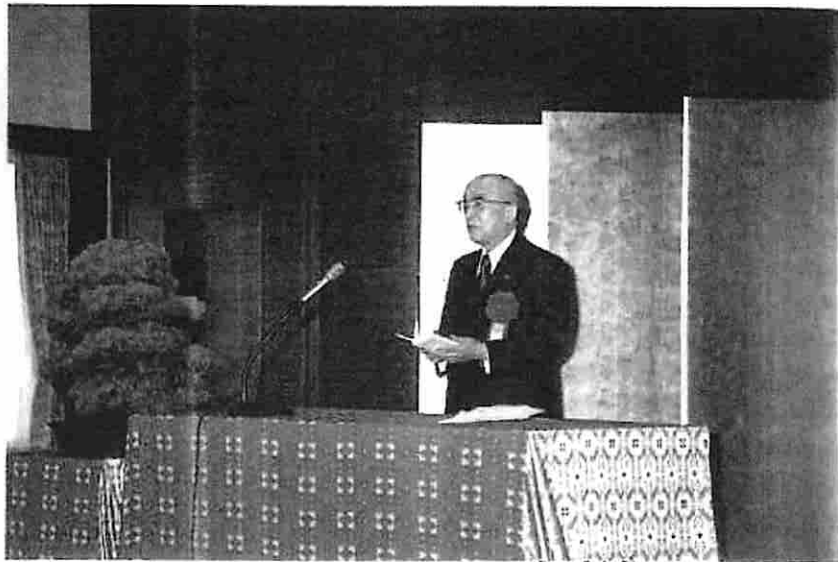


(南西面全景)

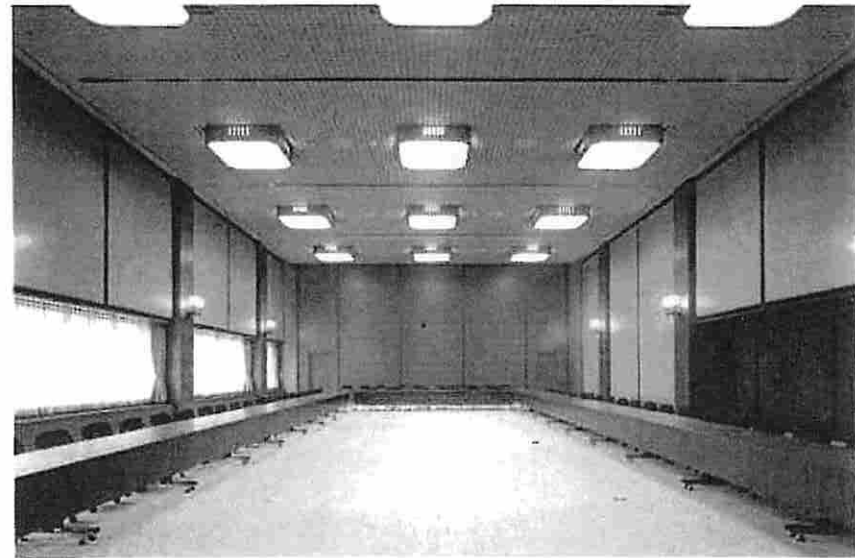
目次

| | |
|--------------------|------|
| 新庁舎落成式から | 1 |
| 式 辞 | 大内恒夫 |
| 祝 辞 | 寺田治郎 |
| 祝 辞 | 住 栄作 |
| 祝 辞 | 石井成一 |
| ~~~~~ | |
| 新庁舎の落成を祝う | 西村宏一 |
| 東京地方裁判所と私 | 井口牧郎 |
| 新庁舎の落成に寄せて | 千葉和郎 |
| 庁舎新営計画のあれこれ | 中村修三 |
| 築地仮庁舎から新庁舎まで | 岡田光了 |
| 庁舎新営工事の経過報告 | 鈴木武利 |
| 新庁舎讃歌五首 | 安部 剛 |
| 新庁舎偶感 | 早川義郎 |
| 建物概要と仕上材料について | 深谷健雄 |
| 新庁舎の電気設備計画の基本方針と特徴 | 浦上裕雄 |
| 新庁舎の機械設備について | 菅谷 健 |
| 現場雑感 | 新井勇一 |
| ~~~~~ | |
| 春 光 | 宇野竹甫 |
| 調停事務と新旧庁舎 | 笠原愼一 |
| 執行官と新旧庁舎 | 橋村春海 |
| 座談会「旧庁舎時代を偲んで」 | |
| 新庁舎での日々 | 村重慶一 |
| 新庁舎に入っの感想 | 木村幸好 |
| 新庁舎アラカルト | 下田貞夫 |
| 新庁舎雑感 | 岸本文康 |
| 新庁舎あれこれ | 太田武利 |
| 近代的な裁判所 | 森 順一 |
| 編集後記 | |





(落成式において祝辞を述べられる寺田最高裁判所長官)



(大会議室)



(大合議法廷)

新庁舎落成式から

東京高等裁判所、東京地方裁判所、東京簡易裁判所及び東京第一、第二檢察審査会の合同庁舎が、本年四月完成をみるに至り、去る五月三十一日午前十時三十分から新庁舎十八階の大会議室において落成式が挙行されました。

式は、寺田最高裁判所長官、住法務大臣、石井日本弁護士連合会会長をはじめ、法曹各界を代表する来賓多数の御臨席のもとに、大内東京高等裁判所長官の式辞に始まり、川崎最高裁判所事務総局総局長の工事経過報告、新庁舎建設に当たって功労のあった工事関係者らに対する感謝状の贈呈と進み、そして、来賓の方々から御祝辞を賜ったうえ、最後に工事関係者代表の謝辞をもって、簡素ながらも格調高い雰囲気の中に無事終了しました。

ここに、落成式の概要を御報告するとともに式典において述べられた式辞及び祝辞を掲載する次第です。

式 辞

東京高等裁判所長官 大内恒夫

本日ここに最高裁判所長官をはじめ來賓多数の御臨席を得まして、東京高等裁判所、東京地方裁判所、東京簡易裁判所及び東京第一・第二檢察審査会合同庁舎の落成式を挙行する運びとなりましたことは、まことに喜びにたえないところであります。

ここに完成いたしました新庁舎は、中央官衙整備計画の基本方針に基づき、旧最高裁判所庁舎跡地に建てられたもので、最高裁判所の設計、最高裁判所及び建設省の監理のもとに、十四にのぼる企業体が一致協力して施工にあたり、昭和五十四年七月の着工から約五年の歳月をかけて本年四月すべての工事を終わり、完成を見るに至ったものであります。地上十九階、地下三階、延床面積約十三万六千平方メートルというこの庁舎は、わが国の裁判所の建物としては、最大の規模のものであり、法廷部門を低層階に、事務室部門を高層階に配置するなど機能的な面の整備とともに、耐震、防災等に関しても最新の設備を施した画期的なものであります。

東京高等裁判所がこれまで執務して参りました庁舎は、昭和十年に東京民事地方裁判所庁舎として建設されたもので、戦後の日本国憲法の施行間もないころは、最高裁判所も同居していたなど数々の思い出を秘めた庁舎でありましたが、歳月の経過とともに老朽狹あい化が著しく、また、東京地方裁判所等が執務しておりました庁舎は、各所に分散して不便が甚だし、一日も早く首都の裁判所によさわしい庁舎を新営することが強く望まれていたのであります。幸い、この度、高地、簡裁を一体とした合同庁舎が完成しましたが、これにより、これまで訴訟関係者はじめ多くの方々におかけしてきた不便が解消されるばかりでなく、円滑な裁判の運営に資するところが多大であると信じております。

申すまでもなく、裁判の仕事は、どんなに立派な施設を作ろうとも、またいかに制度を整えようとも、結局、その結果は、その仕事に携わる人間の努力にまづほかありません。最近、国民生活や社会事情の急激な変化とともに、裁判所に提起される各種事件はますます複雑、多様化の度を加え、司法の役割はいよいよ大となつております。私たちは、この機会に、あらためて裁判所に課せられた使命の重大性に思いをいたし、さらに清新の氣をもつて職務に精勵し、より、層国民の信頼と期待にこたえて参りたいと思ひます。

終りに、この庁舎の新営に多大の御尽力と御配慮を賜りました関係各位並びに幾多の困難を克服してよくこの工事を完成されました工事関係者各位に対し、心からの謝意と敬意を表しまして、私の式辞といたします。

祝 辞

最高裁判所長官 寺田治郎

本日、ここに、東京高等裁判所、同地方裁判所、同簡易裁判所、同第一及び第二檢察審査会合同新庁舎の落成式が挙行されるに当たり、お祝いを申し述べる機会を得ましたことは、私の深く喜びとするところであります。

これまで、東京高等裁判所は、昭和十年に東京民事地方裁判所として建設された庁舎を使用し、東京地方裁判所は、昭和三十一年に建設された同裁判所の刑事部庁舎を中心として、数箇所に散在する庁舎を併せて使用してまいりましたが、いずれも、年ごとに老朽と狹あいの度を加え、特に、東京地方裁判所においては、庁舎が各所に分散していたため、種々の点で不便を免れず、かねて新庁舎の建設が強く望まれていたところでありました。

この度、この念願が実を結び、司法部ゆかりの最高裁判所旧庁舎跡地に新庁舎のしゅん工を見るに至りました。この新庁舎は、皇居周辺の景観との調和にも配慮して計画され、大裁判所としての特質を考慮した最新設備を完備し、かつ、司法部の建物としてはこれまでにない規模を有する機能的な高層建築物で、正義の殿堂として長く我が國にその威容を誇ることと信じます。新庁舎の落成について心から慶祝の意を表しますとともに、その建設に当たり御支援と御協力を賜りました関係各方面の方々に対し、深甚の敬意と謝意を表する次第であります。

裁判所の取り扱う事件は、最近の社会情勢を反映して、従来にない複雑困難な問題を含むものが多くなつてきております。私どもといたしましては、これまでに以上に工夫と努力を重ねて事件の適正迅速な処理を図り、裁判所に寄せられた国民の期待と信頼にこたえていかなければならないと思ひます。

裁判官をはじめ職員各位におかれては、この喜びの日を契機として決意を新たにされ、それぞれの職務に一層精勵されま

すよう切望してやみません。

また、御臨席の各位におかれましては、司法の重要性を御理解くださいます。今後とも、裁判所のため一層の御協力を賜りますようお願い申し上げます。

これをもちまして、私の祝辞といたします。

祝 辞

法務大臣 住 栄作

本日、東京高等裁判所・東京地方裁判所・東京簡易裁判所及び東京第一・第二檢察審査会の合同庁舎の落成式が挙行されるに当たり、一言お祝いの言葉を申し述べる機会を得ましたことは、私の深く喜びとするところであります。

本日、ここに新庁舎の落成式を迎えられた東京高等裁判所を始めとする各裁判所及び各檢察審査会は、我が国司法の重要な一翼を担い、よくその使命を果たしてこられたのでありますが、この度、この霞が関の最高裁判所旧庁舎跡地という由緒ある場所に、近代技術の粋を結集し、司法の殿堂にふさわしい庁舎の完成を見るに至りましたことは、誠に御同慶に堪えないところであります。庁舎新営に参画された関係各位の御努力に対し深甚な敬意と祝意を表するものであります。

この明るい近代的な庁舎の完成は、職員の皆様はもとより、訴訟関係人を始めとする関係各方面にも多大の便益をもたらし、その寄与するところは誠に大なるものと存じます。

新庁舎の下で勤務される職員各位におかれましては、今後とも一層職務に精勵され、我が国司法に寄せる国民の信頼と期待にこたえられますよう念願いたしまして、私の祝辞といたします。

祝 辞

日本弁護士連合会会長 石井成一

只今ご紹介を載しました日本弁護士連合会会長の石井成一でございます。本日、東京高等・地方・簡易裁判所合同庁舎の落成式が開催されるに当たり、日本弁護士連合会を代表してお祝いの言葉を申し述べる機会を得ましたことは、私にとって大変光榮に存するところであります。

裁判所におかれましては、かねてから新庁舎建設の要を痛感され、関係各位におかれて、いくたびかの検討を重ねられた結果、ここにめでたく落成式を迎えられましたことは誠に同慶に堪えません。

近代的感覚と設備を兼ねそなえた新庁舎は、内容・外観ともに申し分なく、先進諸国の裁判所施設の中でも、もつとも優れた庁舎の一つとして位置づけられるものと存じます。正に「司法の殿堂」にふさわしいものと拝見しております。

ところで、国民の法に対する意識も人権思想の昂りとともに、伝統的なものから徐々に脱皮しつつあることを看過することはできません。

数多くの立法や法改正はいまでもなく、新しい形態の、また多数当事者の訴訟や紛争も次第に増加しております。

このような状況下において、われわれ司法にたずさわる者としては、社会の進展とそして新しい要求に対して、適切に対応し、人権を擁護し社会正義の実現を目指して、一層国民の期待に副うべき責務のあることが強調されねばなりません。

どうか、これを機会に新庁舎の管理運営に万全を期されますとともに、新庁舎がその機能を十分に生かして、国民のための司法を目指して、名実ともに「司法の殿堂」が築き上げられますよう念願いたします。我々弁護士もこのため大いに協力申し上げたいと存じます。

終りに、本日ご列席の各位とともに、新庁舎の完成を心からお喜び申し上げ、益々のご発展をお祈りし、私の祝辞といたします。

新庁舎の落成を祝う

西村 宏一

裁判所庁舎として世界に誇るに足る東京高・地・簡裁・検察の新しい庁舎が完成し、職員一同の感謝の念と新たな決意のこめられた落成式が行なわれたことを、遙か筑紫の地より、心からお祝い申し上げます。

思えば、準備段階から建築着工、完成へとほぼ十年の歳月の間、最高裁、東京高・地裁の関係当事者の方々（その多くは、何代かにわたるでしょうが）のご苦勞、ご努力に深く敬意を表したいと存じます。それだけに、落成式に臨まれた方々の感慨は、また一入であつたことと推察いたします。

私は残念ながら落成式に参列することができませんでした。けれども新庁舎において二ヶ月余勤務する幸運に恵まれました。新庁舎は、高層建築なるが故に必然的といえる若干の不便さ、関係担当者交替に伴つて生じた見解の相違や全貌の把握困難な段階であつても確定せざるを得ない作業手順等に起因する些かの暇滞などがあるとしても、全体としてみれば至れり尽せりの配慮がなされており、執務環境としても快適であつて、これ以上を求めるとは得難望郷ということになるであらう。

私は我が国の裁判所の仕事振りは、世界的にみても最も秀れた部類に数えることができ

るのではないかと考えております。そして、東京高・地・簡裁は、日本の下級裁判所の顔であるといつてもよいでしょう。それだけに、この世界に冠たる庁舎に相応しく、今後更に一段と精彩のある活躍と成果とを披露していつて頂きたいと、切に念じ期待する次第です。

ところで、裁判所にはこれまでも新しい難問を含む断えが次から次へと提起されてきており、これからも変わることはないと思われま

す。国の三権の一である司法権は、他の二権である立法権、行政権と対立する関係にあるといつても、三権ともその目的は一であり、国家、国民の安定、健全な発展に奉仕するものであることには変わりありません。ただ、裁判所は具体的な争訟において、法に基づき認められるべき権利を保護するということをその任務としており、法と事実の判断において、いかなる方向からの批難、圧力に対しても超然、毅然として振るがざること新庁舎の如きでなければならぬといえるでしょう。この根本を見失ふことがあるとすれば、国からも国民からも見難れることになるでしょう。この帝都の中でも最も秀麗な土地に壮大にして高層な庁舎を設けることができたのも、国及び国民の司法に対する信頼があればこそであります。私も裁判所に職を奉ずる

ものとして、現在勤務裁判所がどこにあるかを問わず、東京の新庁舎を司法のシンボルとして誇りとし、更めて右のことを銘記すべきではないかと考える次第です。

お祝いの言葉を終るにあたり、新庁舎で過した当時いたずら書をした漢字の駄文（到底時と稱しうるものではありませぬので）を、二、三恥を忍んでご笑覧に供し、私の新庁舎においての感動と愛着の思いをおくみとり頂ければと存する次第です。

於新庁舎迎新春

遠望雲岳白雲幽 俯看官衙接似差
清氣猶堂春澤室 茲期職事注新流

寄西窓觀富嶽夕景

西窗空下影霞嬌 陽欲沈山暈朱燃
天鏡銀砂映淡冷 墨痕雄勁秀峰鮮

去東京地裁日述所懷

霄霄韶景彩雲悠 碧殿東瞻嶠島游
司法高樓如禁術 希消塵土些無憂

（福岡高裁長官・前東京地裁所長）

東京地方裁判所と私

井口 牧郎

待望久しかった東京高地簡の合同庁舎は、ここに完成した。この庁舎の建設を企画し、計画を推進し、更にその実現のために努力された数多くの関係者と、永年にわたり旧庁舎の中で苦勞を重ねて来られた先輩職員の方々のことを思わずにはいられない。

庁舎の完成直後に就任した私に、この庁舎のことを語る資格はないのであるが、その完成の時にたまたま出くわし、ここに勤務する幸運に恵まれた我々東京地裁、東京簡裁の職員にとつて、この近代的設備の整った庁舎の特色を十二分に活用し、これを存分に使いこなすことこそ、先人の努力に報いるゆえんであり、それが我々の責務というべきであらう。

私は、戦後間もない頃、最高裁判所旧庁舎（元大審院庁舎）の修復工事の中に裁判所に入り、この霞が関地区にある裁判所の庁舎の戦後の変遷をつぶさに見守ることができただけに、今この巨大な裁判所に日々勤務していても、過ぐる三十年を思い、深い感慨を覚えずにはいられない。

旧高裁、地裁民事部の庁舎には、当初最高裁までが同居していて、最高裁裁判官と我々司法修習生が同じエレベーターに乗り合わせ

ることも珍しくなく、おぼろげな記憶の中にこのことが深く印象づけられていた。この庁舎は、戦災を免れた戦前の本格的建築であつただけに、高い天井、広い廊下など本場に裁判所らしい裁判所であつた。そこでは、どの裁判長も近づき難い偉い存在であつた。

一方、皇居寄りに建築されたばかりの木造二階建の旧々刑事庁舎は、当時の経済状況の下では致し方ないことであつたが、所詮仮庁舎の域を出るものではなく、判事室で合議を傍聴していても、この粗末な部屋のおかげで、裁判官方にかえつて親近感を覚えたような気もする。この庁舎では、建付のよくない庭具と相まって、廊下を歩く足音が法廷に入り込むことなど余り気にならない程であつた。判事室の隅の隅で、当時の世相そのまゝの数多くの犯罪が処理されたのであつた。この庁舎の前庭の一角に一段と古ぼけた木造三階建の建物が残っていて、確か執行吏役場等が使つていたように思うが、これが、なんと昭和四年に永田町に移転した府立一中の旧比谷校舎の名残であるといひ、よくあの大きな戦災の中で焼け残つていたものと、個人的な感慨にふけつたものである。

昭和二十五年に判事補に任官してからは、民事部に所属し民事庁舎に二年余り勤務したのち、当ても余り例はなかったが刑事部に移り、直ちに統一公判官のメーデー事件の審理に関係することになる。この事件の審理には、最高裁旧庁舎東側に接するいわゆる圖書館棟内の大型の法廷のいくつかが使用された。その際の鈴巻を締め、両手錠の手を振りかざし乱舞の姿で入廷し、即時釈放と統一公判の要求を掲げて語気鋭く裁判長に迫るばかりか、法壇に駆け上らんばかりの傍聴者の無秩序ぶりは、左陪席に過ぎなかつた私にも強烈な印象として残つており、このような状態が三月くらい続いたように思う。この圖書館棟には、十年後に民事部の破産部の判事として数か月間勤務したことがあり、何か因縁めいたものを感じる。

メーデー事件が一部に併合された機会に刑事部の構成が大きく変わり、私も部が変わつて、当時完成間もない第三新館に入居した。法廷は、書記官室が、ここに入れない多くの部から決ましがられたものであり、私

の刑事裁判官として最も恵まれた時代であったといつてよい。それでも、当時の世相を反映したいいくつかの公安事件は、傍聴席の数や法廷整備の關係があつて、古い図書館棟内の大廳法廷を使用するのが常であつた。こうした快適な生活は約二年ばかり続き、初めての地方への異動によつて私の判事補としての東京地裁勤務を終る。

その後、地方生活、最高裁勤務、二度目の地方生活の後、再び東京地裁勤務になった頃は、丁度当時の新刑事庁舎の完成引越直後のことであり、見違えるように立派に出来上つた見晴らしのよい所長室に挨拶に入つた時の印象が鮮烈である。ただこの折の勤務は、民事庁舎で暫くの間続け、前述の破産部の勤務を経て程なく事務総局入りとなつた。

五年余り後の三度目の東京地裁勤務は、第三新館内の執行部をもつて始まり、私としては最も長い三年間の同一勤務となる。それにしてもあの第三新館がなんと早く古びてしまつたことか、鉄のサッシュに錆が浮いて窓の開閉も不自由という有様であつた。この三年間は、旧強制執行法に内在する欠陥をフルに活用した結果としての困難な事態に運用上の工夫でどう対処すべきか、新しい執行官制度を古い仕来りの残る現状にどう当てはめ、これをどう改革していくかについて思い悩み続けた三年であつた。その中では、大阪地裁にならない入札制を試験的に不動産競売に採用実施したことが記憶に残る出来事であり、そ

の後いくつかの庁がこれに続きかなりの実績を示したことが入札制を原則とする民事執行法の制定の一因となつたことを思うと、まことに感慨深い。

執行部勤務を経て民事通常部に移るに当たり、刑事部庁舎南側に増築されたいわゆる第二庁舎に入つた。文字どおり老朽庁舎から新庁舎への移転であつた。この年は、新任判事補を東京に集めて指導育成するいわゆる研さん制度が発足した年でもある。私は東京本務の新任判事補を含めた合議部を総括することになったが、新しい構成の部が発足するに当たり、左席席に合議用メモを作成して貰うことを始め、その実力の向上と合議事件の処理に大いに威力を発揮することになる。その後、この合議メモなるものが判事補研さんの運用の機会に徐々に広まっていき、今や判事補の間にすっかり定着したと聞くと、これまた感慨深いものがある。

その後、再度の事務総局勤務を経て関東地方勤務の旅に出た。この旅は約三年で終り、東京勤務に戻つたのは東京高裁判事としてであつた。当時すでに現庁舎の鉄骨は十数階部分まで組み上がつており、民事庁舎五階の判事室で合議を重ねながらこの大建築を見上げても、当時その完成した姿を容易に想像することはできなかったし、その数か月後に四度最高裁勤務を命ぜられるに及び、やがて完成する新庁舎にこのような形で勤務することになろうとは夢にも考えられないことであつた。

新庁舎の落成に寄せて

このたび、東京高等・地方・簡易裁判所及び同第一・第二檢察審査会の合同庁舎の新築工事が見事に落成しましたことは、まことにめでたく、大内長官をはじめ、長年新庁舎の完成を待ち望んでおられた職員の皆様のお喜びもさぞかしと察せられ、心からお祝い申し上げます。

新庁舎は霞が関の司法ブロックともいふべき一角の、赤レンガ建てであつた最高裁判所旧庁舎跡地に、上品な薄いベージュの壁面を輝かせる地上十九階・地下三階の威風堂々たる高層建築物で、法廷部門を低層階に集約し、その部分の外壁に工夫を凝らしたデザインが効を奏し、重厚で気品に満ちた、しかも近代的センスを感じさせるビルとしてそびえ立っている。昨年十一月事務移転の移転が終つた直後、詳細拝見させて頂いたが、屋上からは、遠く南西に富士山を、北東に筑波山を、東から南には東京湾を距てて房総の丘陵を、南から西には相模・丹沢の山や丘を望み、皇居周辺や日比谷公園の木々の緑も近視、北にやや離れた高台に二列に並ぶ国会議事堂・国立国会図書館・最高裁判所・国立劇場の建物が見られる。今後隣接地帯の整備が進

た。

思えば、私の裁判官生活は東京の裁判所の庁舎の変遷の間を見えつ隠れつしながら推移して来たことになる。私は、この庁舎のて静かにその間の歩みを思い返している。

(東京地裁所長)



千葉和郎

いながら、よりよき司法を目指して日々奮闘の論を聞かせたことやそのような中で優れた判例や先例を作り、司法の伝統を築き上げて行つた先達の労苦を追想した次第であつた。新庁舎正面玄関ホール中央に、最高裁判所旧庁舎の同様の位置にあつたシャンデリアが輝きをまして飾られ、また十八階大会議室壁面の照明灯にも同様の工夫がなされているのはまことに周到適切な配慮と申すべきでしょう。

新庁舎は、今や裁判所として世界一の規模を持つ立派な建物と評されて執務が開始されているわけであるが、かつて最高裁判所の新庁舎が竣工して間もなく、案内した外国法曹の訪問客の一人から、新築の庁舎の素晴らしいさへの賞賛と併せて、このような建築が認められる日本の裁判所の地位の高さが羨ましい、と真剣に語られ、私は改めて、裁判所に對する国会や政府、ひいて国民の期待と信頼の大きさと裁判所の責任の重大さを痛感したことであつた。このたびの新庁舎建設に要した巨額な費用を思うとその感慨はますます強いものがある。加え、近時裁判所に提起される事件は、時に従来なかつた類型のものを含

むなど、複雑困難の度を増し、その迅速適正な処理のためには裁判官も職員も一体となった工夫と努力とが要請されているところだ。

「居は氣を移す」といわれます。氣品に満ち濃厚さと威厳を感じさせる新庁舎のたたずまいは、助ける当事者に思わず嫌を正す思いを抱かせ、執務する人達にも行動に品位と慎重さを促すことになるでしょうし、またその機能性は創意と工夫をかき立てるでしょうが、一面余りの機能性は各人が自らの部屋に籠り切りになつて、相互の切磋琢磨が薄れ、当事者への配慮にも欠けるところが生じがちで、いわゆる官僚主義の独善に陥るおそれなしとせず、さらに努力と配慮とが望まれます。

新庁舎の落成に当り、ここに執務される皆様方が決意を新たにされ、それぞれの職場で、その環境と同様に素晴らしい仕事をされて国民の期待と信頼に応えられますよう念願してやみません。

(東京家裁所長)

庁舎新営計画のあれこれ

中村修三

(はじめに)

在朝在野を含めて待望久しかった東京高地図、検査合同庁舎の新営について、その具体的な計画の作業が開始されたのは、私が東京家裁事務局長になつてからほぼ一年後の昭和五十年九月頃ではなかったかと思ひます。すなわち財務局からその頃事情聴取の申入れがあり、それからことが始まつたわけですが、その時、私ども高裁事務局の幹部一同は「ついに来るべき日が来た」という喜びと緊張感の入りまじつた一種の興奮につつまれたことを覚えております。しかし、それも束の間、それからのは連日連夜基礎資料の作成や説明に追われ、さらには東京地裁や最高裁経理局との打合せ等に明け暮れることとなりました。その頃私は友人たちに「最近ばかりは建築屋になりましてね」とよく冗談を言つたものでした。

工事は、幸いにして念願どおり最高裁直営で一切を施行することにきまり、ユーズアである高地簡裁の意見も十分にとり上げるとの意向が示されましたので、私どもは国民の親しみやすい明るさと柔らかなさがあり、しかも法の殿堂たるにふさわしい威厳と風格を備え

た庁舎を作つて頂こうという大方針のもとに、設計プランその他あらゆる問題に取り組むことにいたしました。

たしか昭和五十四年七月頃に着工の運びとなり、私は基礎工事中の昭和五十五年九月に事務局長の任を離れましたが、以下思いつくままにその関係者の間で苦楽を共にしながら取り組んだ問題点などを記してみたいと思ひます。

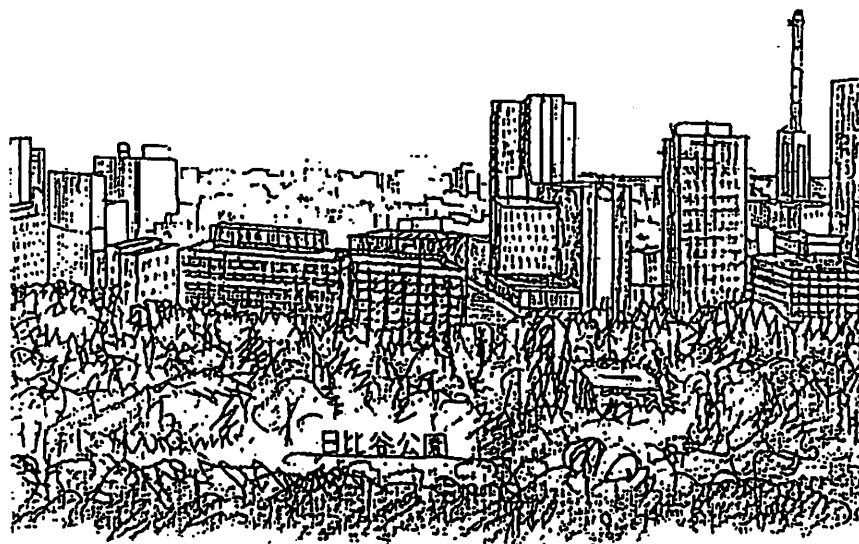
(新庁舎のフォーム)

まず最初に、新庁舎のフォーム(型)をどのようなものにするかが大きな課題となりました。最近新営された名古屋、仙台、大阪等の合同庁舎に倣つて、法廷棟と事務棟とを一応分離してこれを併立させる形をとるものか、もしくは連当であらうと考えましたし、年輩の裁判官などから高層ビル形式は何となく気持が悪く、また法廷に向うのにエレベーターによる縦の導線に乗せられるよりはやはり横歩きで行ける方が安心であるとの意見も出ていましたので、当所し型とかコの字型、ロの字型などを含めてA、B、C、Dの四案が考案されましたが、敷地の形状とその面積及びコストの関係などから結局下層に法廷を置き、

その上層に事務部門を積み上げる重箱型の高層方式であるA案によることとなりました。年輩の裁判官の間には落胆の色がくせませんでした。が、ぼくたちの多くは完成までに定年が来てしまふのだから、もうこれ以上中村君を困らせないことにしよう」というような次第で、この件は落着きました。

さてそれからまだまだ大変でありまして、A案はさらにその1ないし15という具合に変転し、営繕関係者らによる粒々辛苦の設計作業が重ねられた結果、ようやく現在みられるフォームに定まつたわけですが、早なる四角四面の高層ビルではいさか風格に欠けますので、いくつかの円柱を外面に露出させる古典的な趣向などもお願ひしていただきました。コストの関係などからそれは無理ということで、その代りに下層部分の表側と裏側に楕圓を取りつけ、腰の坐つた建物という感じを出すための工夫が加えられました。

なお、右の設計によりますと、新庁舎は地下三階、地上十九階、延床面積約十三万平方メートル、高さ約九十メートル、開口約百三十メートル、興行約七十メートルという巨大な高層ビルになりますので、年輩者ならずと



も多くの職員が地震のことを心配したのは当然でありました。この点については、警備の技術が綿密な研究を加え、関東大震災の震度六の約一・五倍の地震にも耐えられる構造設計をいたしましたし、防火扉の設置その他緊急事態発生の場合の避難経路等の措置についても万全の検討が加えられたことはいうまでもありません。

(レイアウト)

次に、新庁舎のレイアウトについてもつと

も難渋したのは、二つの

有効利用、冷暖房の効率化等をはかるために提案されたものですが、一か部一家族的な気持の問題もからみまして、裁判部の一部や全司法から可成り強い反対の声が出ました。全司法の対策委員会との間で、しまいは「何故この方式にしなければならぬのか」「何故この方式ではいけないのか」といったすれちがいの烈しいやりとりをくり返したことも今では思い出しがたくなりました。

又、ユーザの立場から法廷や廊下の天井を出来るだけ高くしたい、廊下の幅もなるべく広くしたいものとな願ひまして、経理局に格別の苦心をして頂いたことも忘れられません。建築の専門家とちがいで、なにぶんわが国の官署としては日本一といわれるスケールの建物でありますだけに、私も素人には机上のプランと実際に出来るものとのイ

う、例のデパートなどでやっている方式を取り入れてはどうかとか、公判立会に出廷する検察官に雨を避けるため検察庁から新庁舎まで地下道を作ることではできないものかという風な忙中閑話もありましたが、これらがいずれも夢物語に終わったことはいうまでもありません。夢物語といえば、基礎工事が始まった頃、こんなに広く、深く地下を掘るのだから、千代田城に近い場所でもあり、きつと小判や金刀がざくざく出るのではないか、出た時は景気よくそれで一杯やろうではないかとみんな話合っていました。これもまた不発に終わりました。

(その他)

そのほかにも語るに足るいろいろなことがあったように思いますが、月日の経過とともに多くのこまかいことは忘れてしまいましたが、そこで最後に少しとりまとめてつけ加えてみようと思いましたが、新庁舎の外壁の色をどうするかという点も大事な問題でした。冒頭に申しました大方針に沿って、明るくて品の良い色をあれこれ物色し、明るい乳灰色ということに一応きまりましたが、小さい見本だけでできめとおかしい結果になりかねませんので、四畳半敷ぐらいの試作品を三つ作って頂き、現場に立てかけて当時の大塚東京高裁長官、矢口事務局長をはじめ大ぜいの関係者でこれ打ち眺め、又、周辺のビルの色とも見くらべた上、概ね衆目の一致した背味があったアイボリー色に落ち着いた次第です。

メージとがうまく結びつきませんので、出来上がったものをこの眼でみるまではやはり気がかりでありましたが、法廷も廊下も良好な出来栄になつており、心ひそかに喜んでおりました。

もう一つうれしく思っておりますのは、裁判部から応接室、和解室、準備手続室(刑事部)については事前準備室、事件関係人の待合室(等)がほしいとか足りないとかの声が強出してしまったので、これに応えるため多目的に使用できる二つの部屋を、この構内に玉のように配置して頂きましたが、この構内は今でもグッド・アイデアではなかったかと思っております。

(機械部門等の措置)

ところで、新庁舎はさきに述べましたところの巨大な建物であり、エレベーターの数も数十台にのぼりますので、庁舎完成後の空調関係、電気関係等の機械部門もおのずから大規模なものとなり、これを何びとの手によって運用するのがよいかという点が大変な課題にならざるを得ませんでした。機械部門のどこかに故障が生ずれば、たちまち多数の職員等の安全や健康にかかわって来ますから、これはやはり実力のある民間会社に管理運用を委託するのが相当ではなからうか、その場合現に勤務している二十数名の電工、汽かん士等の身のより方をどうすればよいか、という難問をかかえ込み、外注反対を唱える全司法対策委員会ともすい分話し合いを重ねたこと

そのほか、法廷や調停室をいくつ作ればよいか、大合議法廷の傍聴席はいくつぐらいがよいか、証言台はどういう具合に置くのか、一階ロビーが広すぎる、警備上の問題が生じはしないか、エレベーターの数、トイレの数と場所をどうするか、洋式とり入れるか、診察所の位置はどこがよいか、何台分の駐車場をどこに作るか、地蔵と高裁の運転手関係を検討すべきではなからうか、運転手の控室を地階に配置せざるを得ないが、何とか地上階で執務しているような感じを持たせる工夫はないものか(この点は、のちにサンクン・ガーデンII沈床園II方式がとられました)。

図書十万冊の格納が予定される書庫その他の図書部門をどこにどのぐらいのスペースをもつて配置するか、地蔵と高裁の図書業務もまた一本化する必要はないか、職員のリク施設をどうするか、備品として新しくどのようなものを買いととのえるべきか、等々挙げれば際限がないほどに問題点はあつたものでした。その一々について述べることは省略いたしますが、これらの諸点は、関係者の精力的な検討によつて一つ一つ解決されて行つたわけですが、このようにして出来上がった新庁舎の使い勝手は、果していかででありましょうか。おそろくすべて上乗というわけにはいきませんが、新庁舎が多くの関係者による苦心の結晶であることには変わりがないと思

(むすび)

でした。結局この問題は、庁舎警備、清掃業務の外注問題と共に、私が事務局長の任を離れたのちに適宜適切な措置がとられた模様です。

なお、機械部門、庁舎警備等の庁舎管理業務の全般について、念願どおり管理課が新設され、万全の体制がとられるにいたつたように、これまた何よりであつたと思つていきます。

(対外関係)

話は変わりますが、ご承知のとおり裁判所の庁舎内には、公判に出廷する身柄拘束中の刑事被告人の、はじめ、弁護士、検察官の控室、記者クラブ、郵便局、食堂、売店等各種の施設が置かれるのが通例でありまして、新庁舎においてもこれをどのぐらいのスペースをもつてどこに配置するかが中々頭の痛い問題でありましたが、部外関係者らの深い理解のもとにその折衝はいずれも予期していた以上にスムーズに運びました。

そのような折に難詰の出たことですが、公判に出廷する身柄拘束中の刑事被告人の数は一日平均約百名にのぼり、開廷時間におくれないよう小昔の東京拘留所から交通渋滞の中を走り抜けて搬送して来るのには、拘留所として並々ならぬ苦勞がある由で、この際いっそ地下鉄南千住駅から護送専用電車を走らせ、霞ヶ関駅から新庁舎の地階に引き込むことにしてはどうかという誠に痛快な話が出ました。又、職員や事件関係者らも地下鉄霞ヶ関駅から直接新庁舎の地階に入入りできるよ

かくして、ここに新庁舎はめでたく霞が関の一角にその偉容をあらわしました。その姿を眼のあたりにしまして、新設計図の一端に参加した一人として、感慨一入のものがあつた。多くの関係者の皆さんもおそろく同じ思いではないかと思ひます。そのうえ、卒直に申しまして、完成をみた新庁舎は、当初私どもが予想していた以上に明るく、また中々の風格を備えたものとなつております。ここまてことを運ばれた経理局並びに建設業者を中心とする関係者の方々の長期にわたる努力に對しあらためて深い敬意を表しますとともに、この新庁舎で勤務される職員の皆さんが法の殿堂としてのこの新庁舎の機能を十分に活かされ、国民の司法に対する信頼と期待に應えるべく一層仕事に励まれますようお祈りしたいと思ひます。

(司法研修所教官・元東京高裁事務局長)



築地仮庁舎から新庁舎まで

岡田 光了

なぜか私は、東京地裁の歴史的な引越しに縁がある。

昭和三十六年晩秋、地裁刑事部が、築地からどき橋の近くで旧海軍経理学校建物をそのまま使っていた仮庁舎から、待望の新築成った祝田橋角の今では旧庁舎といわれる建物へ移転した際には、私は任官七年目の特例判事補で刑事四部の陪席であった。それから二十二年の歳月を経た昭和五十八年十一月から十二月にかけては、またまた旧庁舎から規模世界一の新庁舎への移転に、刑事部所長代行(刑事一部兼務)としてめぐり巡った。

ふりかえって無量の感慨なきを得ないが、その一部を書き留めておこうと思う。

築地の仮庁舎は旧海軍の建物だけあって後庭の一部が隅田川に面してカッターの揚収施設が残るなど、海軍予備学生滞りの私としてはなつかしい思い出をそそられたものであるが、マイコトたる単独事件(いわゆる地指事事件)法廷は、ベニヤ板で仕切られたり、点はともかくとして、その壁の腰のあたりがタイル張りであった。ひよっとして便所の跡ではなかろうかと心配になって調べてみたら風呂場の跡であることが判明し、それなら清

潔さの点では問題なしと一応納得することとした。ただ天井のしつこいの一部がはがれて垂れ下がっているのは頂けない光景で、開廷毎にそれを見上げて今日はまだ大丈夫だなと確認しながら審理を進めた。

酷暑の候になると、冷房などないので法廷の窓を開けることになるが、東京湾の潮風に当時汚濁進行中の隅田川の川風がまじって吹き込んできた。そこはかとなくその香りは今でも憶えており、その記憶と共にそのころ多かつた冤罪防止法違反補導処分判決官渡の情景などがよみがえってくる。

判事室でも合議中、裁判長の肩にパサリと白い粉が降ってきたことがある。見上げると天井の塗料がはげ落ちたのであった。

このような暮しよりの所から、日比谷公園や皇居の松林を間近に眺める祝田橋角の八階建の近代的ビルディングに引越してきたのであるから、長屋から大名屋敷に入った位の感激があった。

室のたなずまい、階層度の新しさに目をみはり、これなら合議も記録読みも質量ともにメートルが上がるだろうと思える程であり、床には当時最新の建材であったPタイルがし

妨げになると認めた当該裁判官が、その中止命令とこれに従わない場合の拘束、消音措置の警告を書面で発する、その書面を木札に張りこれを裁判所職員が宣伝カー乗員に示す、従わなければ強制措置という順序になる筈であるが、既に中止命令を示した段階でやめるか、急いで立ち去るかで落着いたようである。新庁舎の法廷では外部の騒音を十分に遮断する構造になっているので、この法律による対応の風景は見える由もなくなったわけである。

七百一号法廷のことにも触れておこう。これは旧庁舎七階にある最大の法廷で、概ね大型の要多数開廷事件の審理に用いられたものであるが、この裁判長席には、ロッキード丸紅ルート事件の百九十一回を始め、私も随分坐ったことになる。

この法廷の構造についていうと、新庁舎一階の大法廷と比べて縦長で、裁判官席はやや高く、これとバーとの間のスペースはやや広い。傍聴人席は八十六と多数であったが、法壇に坐ると(慣れたからの話であるが)、一べつとして法廷内全部が視界内に入り、すみずみまで把握したという実感が訴訟指揮を進めることができた。この実感の由来するところは縦長構造と裁判官席の高さの点であらう。

著名事件で新聞記者のメモ取材を許可する場合、傍聴席の一角に相当数の記者席を指定した。多いときは三十四席にも及んだが、この経験が新庁舎一階の大法廷記者席数を定

きつめられ、食糧品扱いで水をこぼさないように注意せよという御触れも極めて自然に受け取られた。

その幸福感もまたさめない半年後には転動でこの庁舎から出るようになったが、その三年後に再び入り(刑事二十六部右陪席)、翌年夏には転出して約六年後に三たび転入、刑事十八部二係を経て昭和四十八年夏に刑事一部に移り、爾来裁判長として旧庁舎の最後まで過ごしたという経過となる。

ここで過した合わせて十三年余の間に、三階単独法廷、五階合議法廷、七階合議大法廷などを随分使わせて頂いたが、構造、設備などの点から旧庁舎限りの思い出となるであろうことどもを二、三書いておこう。

一つは特別製の証言台のことである。どの裁判所でも証言台は旧来、裁判官席の真前におかれ、交互尋問の発問は証人の左右からなされるという形になっており、被告人の陳述台を兼ねているのが通常である。ところが、旧庁舎の刑事部に限り、可動式椅子付証言台が作られ、英米法廷のひそみにならぬ裁判官席の左から右の斜横に置かれたのである。

める際の参考にされたようである。

ところで記者諸君としては分秒を争う取材競争の面があつて、本社への送稿のためかなり頻繁に入出入りするところとなる。これはある程度止むを得ないが、法廷の静粛さに対しては相当に害を及ぼしかねない。そこで或る時司法記者会に「開廷中の記者の出入りは最小限度にとどめ、ゆき足しし足忍び足て行うこと」と申し入れたことがあり、かなり自粛の効果をあつたと思うが、廊下に出てから階段をかけ降りるかけ足のすこしは語り草になつてゐる。新庁舎の大法廷は一階にあるから様相は異なるであろうが、どういうことになるか少し心配である。

終りに法廷外で日常勤務した室のこと。旧庁舎五階の刑事一部判事室も四階の所長代行室も建物の二階に位し、皇居のお隣、松林、丸の内ビル街が窓一杯にひろがり、室を訪れる人は皆、室の中に居る人間をはめることなく専ら景色のよさをほめていたものである。新庁舎刑事部所長代行室

■周辺の緑とはるかに遠くまでのビル群が遠近法で壮大に展開して、訪れる人はまたまた専らその見晴しのよさを賞讃している。このような一大パノラマの眺めも素晴らしいが、旧庁舎代行室の窓の一面におさまった自然と人工の調和の風景もまた見事であつたと想い起している。

(東京地裁刑事部所長代行)

庁舎新営工事の経過報告

鈴木 武利

はじめに

このたび完成しました東京高等・地方・簡易裁判所合同庁舎については、すでに、高裁の広報誌をはじめ、専門誌、業界紙などにより報じられておりますが、内容が断片的であったり、また、余りにも専門的になり過ぎた感があると思われるので、この機会に庁舎新営の計画から工事の完成に至るまでの経過を、まとめて述べてみたいと思います。

工事の経過については、最高裁判所川崎経理局長から新庁舎落成にあたり報告された工事経過報告のなかに、庁舎新営に至るまでの経緯をはじめ、建物の概要、特徴などが細かに述べられているので、全文を掲載させていただきますが、一部重複するところがあると思いますが、主たる工事について内容を補足説明したいと思ひます。

川崎経理局長の工事経過報告

東京高等・地方・簡易裁判所合同庁舎の落成にあたり、工事の経過をご報告申し上げます。

東京高等裁判所、東京地方裁判所及び東京簡易裁判所の旧庁舎は、老朽かつ狭あいの度

が著しく、しかも、震が関東地区内の各所に分散しておりましたため、関係者に少なからざる不便をかけてきたところでありましたが、昭和四十九年五月、最高裁判所が新庁舎へ移転したのを契機に、その跡地に合同庁舎を新営する計画が策定されるに至ったのであります。その後、昭和五十一年十二月、建築審議会から中央官庁整備計画の基本方針が答申されたのを受け、新庁舎の位置、構造、規模あるいは環境の保全、景観との調和、防災対策等について関係諸機関と協議を重ね、昭和五十四年七月、ようやく着工の運びとなったものであります。

新庁舎の設計には、最高裁判所事務総局経理局営繕課があたり、また、監理は、最高裁判所と建設省が共同して担当いたしました。

施工は、建設省が共同して担当いたしました。施工共同企業体、電気設備工事を関電工・東光・新生建設工事共同企業体、空調設備工事を三機・朝日・一設建設工事共同企業体、衛生設備工事を一・斉久建設工事共同企業体、防災設備工事をホーチキ株式会社、受変電等設備工事を株式会社東芝、エレベーター設備工事と電話交換設備工事を株式会社日立製作所がそれぞれ担当いたしました。

着工以来、工事は順調に進み、昭和五十九年四月、総工事費四百四十億円余を要した新営工事のすべてを完了し、ここに新庁舎の落成を見るに至ったのであります。

新庁舎は、地下三階、地上十九階、塔屋一階、延面積十三万六千八百一十一平方メートル、最高の高さ九十二・〇メートルであり、わが国の裁判所庁舎としては初めての高層かつ大規模なものであります。このため、建物の建築に際しては、近代技術を駆使して高い耐震性の確保と防災施設の完備を図るとともに、建物の周囲の緑化に努め、また、外装の色調を周囲の建物と調和させるなど付近の環境の保全にも意を用いたものであります。この庁舎においては、裁判所がよくその機能を発揮することができるよう、法廷、調停室等を低層階に、事務室等を高層階に配置して動線の機能的処理を図り、詳細な案内表示と各種の身障者用設備を整えて関係者の利便を図るなどの配慮を加えるとともに、品位と重厚さを重視した意匠を施しております。その他の設備面においても、エネルギーの有効利用と省資源対策、快適な執務環境の維持等に近代技術の粋を集めております。

着工以来、四年十か月にわたる長い工事期

法であると同関係者一同感心しました。

間でありましたが、この間、無事故、無災害で今日新庁舎の落成をみるに至りましたのは、ひとえに鹿島・三井・住友建設工事共同企業体をはじめとする工事関係各社の優秀な技術とご協力の賜物であります。ここに厚くお礼を申し上げますとともに、これまでに寄せられましたご臨席の各位の深い御理解にも深甚の謝意を表するものであります。

以上をもちまして工事の経過報告といたします。

昭和五十九年五月三十一日

最高裁判所事務総局経理局長

川崎 義徳

建築の躯体及び外装工事

庁舎の新営工事は、昭和五十四年七月二十日、建築第一期工事の着工により開始され、まず、最高裁判所旧庁舎（赤れんが庁舎）の地中埋設基礎の撤去をはじめ、新営工事に支障をきたす一部旧庁舎の解体、撤去を行ない、同年十月中旬、土工事に着手しました。深さ約四メートルまでの土砂を掘削する第一次根切工事が始まって間もなく、地層が極端に変わる砂層が現れ、更にその下にコンクリートの基礎が認められました。おそらく、これらの砂やコンクリート基礎は、建物の重量を支えるためにとられた軟弱地盤の改良工法と考えられ、当時の建築技術水準の高さがかい間見ることができ、現在の地盤改良にも劣らぬ工



第一次根切が完了すると、更に、第二次以降の根切に備えて、山止め用の地中連続壁工事にかかりました。この地中連続壁は、現場で地下階の外周に添って、地表から約二十三メートルの深さまで、厚さ〇・八メートルの鉄筋コンクリート壁を設け、掘削によって生ずる土砂の崩壊を防ぐとともに、地下階の外壁として用いる重要な構築物であり、総延長は四百メートルを超える大規模のものです。そこで、施工にあたっては、十分な調査と工法の検討がなされ、安全と精度の確保が図られました。又、この時期（十二月中旬）本工事の現場監督及び、建築、電気設備、機械設備の現場に即した細部にわたる設計を行なうため、総勢二十七名の技官からなるプロジェクトチームを組み、設計、施工の一元化をめざして現場に常駐しました。工事も二年目を迎え、現場は工事用資材の搬入、土砂の掘削、搬出、重機類の搬入などに必要な仮設構築物の工事にかかり、長さ約百五十メートル、巾約七メートルの鋼製の通路と構台が二か所に平行して架設され、あたかも航空母艦の甲板を思わせる壮大なものとなり、以降の土工事を始め、地下躯体工事に偉力を発揮しました。深さ約二十メートルに達する土砂の掘削、搬出が完了し、建物の支持地盤の耐力が確認され、基礎工事が終ると、直ちに地下三階の鉄筋コンクリート造の躯体工事に移行しましたが、この工事は、仮設通路や構台を支える支

柱と、地下連続壁を互に突つ張る切梁などに行き手を遮られ、困難を伴いましたが、施工業者の苦心の工法が実を結び、無事工事の終りに漕ぎつけることができました。

地下三階の躯体工事が完了し、鉄骨建方工事が始まり、鉄骨柱の頭が地上に現れたのは、昭和五十五年の暮れも押し迫った十二月下旬でした。この雨後の竹の子のような鉄骨柱群を眺めていると、建物の規模がいかに大きなものであるかが実感としてとらえられるとともに、これらの柱によって、地上十九階までの荷重を一手に引き受けることを考えると、「しつかりたのむぞ」と大声で叫びたくなる思いにかられました。

明けて昭和五十六年三月末、地下二階の鉄骨鉄筋コンクリートの躯体工事が完了し、地上階の鉄骨建方工事に必要な三基の重量物荷揚用のタワークレーンの組立てに入り、五月中旬に組み上がると、大規模建築工事の進行の様子が見え、現場の仮囲いの外から眺められるようになりました。

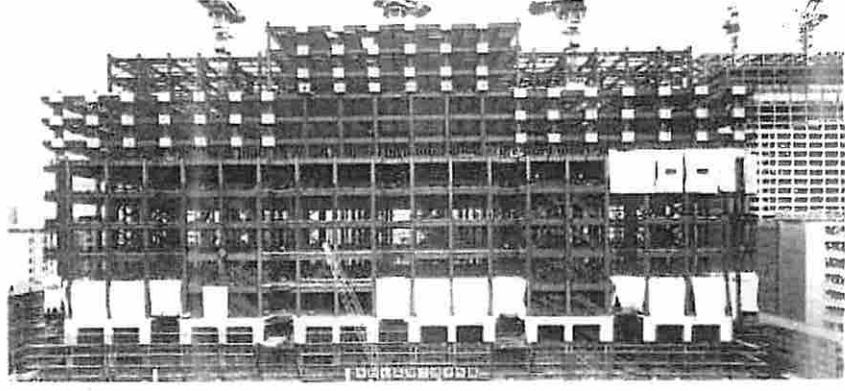
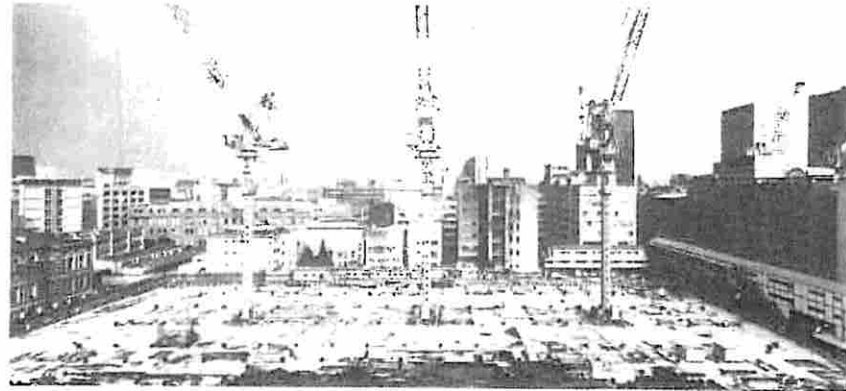
総重量約二万トンの鉄骨は、昭和五十七年三月末、無事建方を完了し、四月八日、上棟式を挙げる事ができました。この頃になると、遠方からも鉄骨の躯体が見えてきたようになり、建物の規模もまた、明確になってきました。地下二階から地上二階までの鉄骨工、三階以上の床のコンクリート工事は、鉄骨工事の完了を待たずに昭和五十六年一月から始まり、鉄骨の建方の後を追いつながら進められ

六月空調設備工事と衛生設備工事が、七月に入ると電気設備工事、続いて防災設備工事がそれぞれ発注され、現場作業の開始とともに、工場において、各種機器類の製作が始まりました。更に、昭和五十六年三月、受変電等設備、エレベーター設備工事が発注され、最後に、昭和五十七年二月、電話交換設備工事の発注により、ここに、全工事の契約が完了しました。

現場は、建築工事が、昭和五十七年三月、地下三階の仕上工事を終ると直ちに、設備関係の据付工事が始まりました。この頃になると、現場の作業員も増えて、広い作業場も、だんだん活気を呈してきました。

工事は順調に進み、いよいよ上階の仕上げの工程に入ってきましたが、仕上工事は、工事内容も多岐にわたり、複雑化するともに設備関係の工事の進捗にも大きな影響を及ぼすので、ここで改めて建築・設備工事の工程表を見直し、これを一本にまとめた基本工程表を作成し、この基本工程表により各工事を調整し、効率のよい施工を実施することにしました。幸い、各工事の担当者は真剣に工程の監理にあたり、一千名近い現場作業員を完全に掌握し、順調に工事を進めることができ、予定どおり昭和五十八年十一月末、庁舎と外構の一部が完成しました。

新庁舎への移転が完了すると同時に、敷地内の旧庁舎、飯車庫の取りこなし工事に着手し、建物の解体をまっけて、残余の外構工事に



昭和五十七年六月中旬工事は完了しました。外装工事は、躯体工事と並行して昭和五十六年十一月中旬から、P.C板取付工事に着手しました。P.C板は、工場で作図を基に、型枠の上にタイルを置き、その上にコンクリートを打ち込み製作するもので、製作中の管理が行き届き、製品の品質、精度ともに良好の結果が得られるため、昨今の高層建築には多く使われております。新庁舎に使われたP.C板は、大きいもので縦約五メートル、横約一・六メートル、厚さ十八センチメートル、重量約四トンの大形のものから小形のものまで十数種類あり、運搬、揚重、取付には、事前に安全対策と工法を検討し、鉄骨建方工事と、コンクリート打設の間を縫って、タワークレーンによって行なわれ、躯体工事完了から約一か月後の昭和五十七年七月上旬、無事完了することができました。

続いて、外部のアルミサッシの取付、P.C板のシール打、屋上防水工事の施工が行なわれ、十一月末、外装工事は完了しました。

この躯体工事と外装工事の特徴は、一つの工事の完了を待たずに次の工事に着手する「ながら」工法で、事故防止のための安全対策、関連工事との密接な連絡、工程の管理などによって初めて実施できるもので、本工事のような大規模建築には不可欠の施工方法であると思います。

内部仕上げと設備工事
一方、建築工事とは別途に、昭和五十五年
か、昭和五十九年四月二十六日、ここに全工事の完成をみる事ができました。

新庁舎の建築及び設備の特徴については、川崎経済局長の工事経過報告、ならびに、工事担当技官により紹介される別稿に譲ることとし、ここでは省略させていただきます。

おわりに
新庁舎は、工事着工以来、四年十か月もの長い工期でありましたが、予定どおり工事を完成させることができたことは、ひとえに、東京高裁・地裁御当局をはじめ、職員の方々の工事に対する深い御理解の賜物と感謝いたします。

また、工事現場では、三百八十万時間を越える無事故という輝かしい記録を樹立することとが、工事関係者として、その喜びはまたひとしおであります。これは、施工関係者一丸となった徹底した安全対策と、現場管理が効を奏したものであります。

更に、新庁舎は、高層かつ大規模建築であり、技術的に幾多の困難な問題が横たわっておりましたが、各工事施工会社の技術陣が、優秀な技術力と、豊富な経験より生まれた新しい工法を用い、見事に、この難関を突破され、終始仕事に愛着と責任をもち施工に従事されたことに深く感謝しつつ、この稿を終らせていただきます。

(最高裁経理局営繕課首席技官)



(正面玄関ホール)



(エレベーターホール)



(シャンデリア)

新庁舎讃歌五首

四年有半人の営為を凝りて建つ新しき庁舎今日仰ぎみる

そのかみの最高裁の跡どころいま新たな時代をひらく

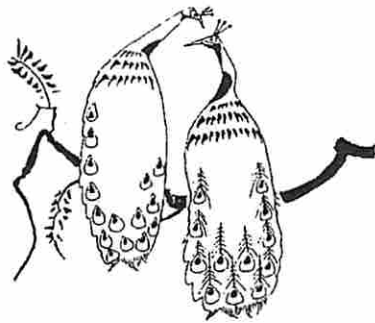
緑なす木々の彼方に浮きて建つ安定をえし姿よろしも
(日比谷交差点にて)

訥々と語る証言に聴き入りぬ午後の法廷の静寂のなかに

もろびとの力こぞりて新しき世紀の法もここに生れむか

安部 剛

(東京高裁第十五民事部判事)



新庁舎偶感

早川義郎

1 落成式を終えて

四月末に新庁舎東側の外構工事の完成をみて、東京高・地・簡裁及び第一、第二検審査合同庁舎の新営工事はすべて完了し、五月三十一日大会議室において無事落成式を終えるに至った。関係各方面に対する新庁舎の披露は、昨年十一月の移転を前に特別公開という形ですんでいたため、この落成式は工事関係者らに対する感謝状の贈呈を中心とする内々のものとなったが、最高裁長官をはじめ、法務大臣、日弁連会長等、法曹各界の長の列席を得て、式典は簡素ながらも格調高く、張りつめた雰囲気の中に行われ、まさに新庁舎の落成を祝うにふさわしいものとなった。この式典が無事すませ、これで新庁舎竣工に伴う行事がすべて終了したのかと思うと、さすがにはっとして肩の荷が降りるような感じがした。

振り返れば、東京高・地・簡裁合同庁舎の新営工事は、昭和五十四年七月の着工以来、実に四年九か月の歳月と約四百四十億円の巨費を要して遂に完成をみるに至ったものであり、裁判所としてはおそらく二度と——少なくともここ数十年は——あるまいと思われるような大事業であった。私も昨年二月現職に

就き、後半のこく一部ではあったが、司法部の歴史に残るこのプロジェクトに参画し得たことは思いがけない幸運であった。

もともと、私のしたことはといえば、これはまさに汗顔の至りで、先人の方々が敷いて下さったレールの上を他の人達に遅れまいとして無我夢中で走り抜けたにすぎない。新庁舎落成までの間に横たわっていたさまざまの困難を克服し、われわれの多年の念願を見事今日の姿に結実させたその功績はすべてこれら諸先輩の方々に帰せられるべきであらう。また、長期間にわたって新庁舎建設のために献身的な努力を惜しまなかった高・地裁の職員の人達に心から深甚の感謝を、最高裁事務局の関係各位に対する謝意とあわせて申し述べたい。

2 新庁舎への移転作業

— 移転時期の決定 —

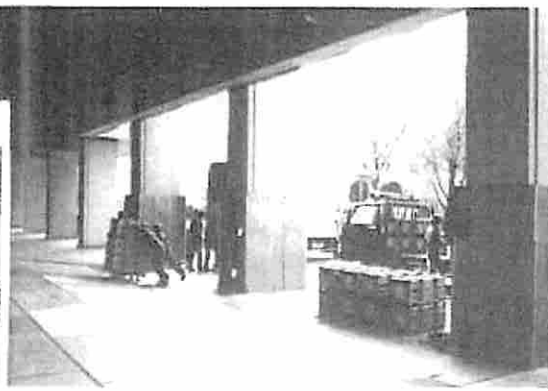
新庁舎への移転時期が昭和五十八年十一月十一日から十二月十一日までと正式に決つたのは、同年二月のことであった。勿論、この移転時期は最高裁事務局とも十分打ち合わせ、新営工事の進捗状況をにらんだうえで決定されたものではあったが、移転終了後に地

裁第三新館や高裁車庫を取り毀して構内道路や駐車場等を整備する外構工事がまだ残されておき、この工事を昭和五十八会計年度中に終らせるためにはどうしても十二月上旬に新庁舎への移転を終え、すぐにも外構工事にとりかからなければならないということから逆算された一面もあり、果して決定されたこの移転時期までに本場に新営工事が間に合うのかどうか不安がないではなかった。この時期、新営工事の進捗状況は、躯体工事が完了し、外部PC板及びサッシの取付けが一、二階を除いて出来上がり、内部の仕上げ工事は全館とも地下工事を実施中であった。以後、矢口前高裁長官とも建築中の新庁舎に度々足を運び、ヘルメットをかぶり頭上の仮設物や足もとの器材等に気をつけながら工事の進捗状況を何度か現場に確かめた。工事が日に日に進んでいくさまに安堵感を覚え、そこに働く人達を頼もしく見守った。内部工事のピーク時には、千人を越す作業員が庁舎内に入り、作業現場には夜遅くまであかりがとまり、火花の飛び散るのが夜空に見えたりもした。しかし、新庁舎は、千人を越す作業員が働いているとは思えぬほどに静まりかえり、この庁舎

の底知れぬ大きさを黙然と示していた。

— 移転本部の設置 —

その後、移転作業を能率的かつ円滑に遂行する必要から、移転計画のためのいわば参謀本部として移転本部が、実施部隊として移転



実施本部がそれぞれ高・地裁合同で設置され、第一回打合せが昨年八月二日に開かれた。以後数次の会合が重ねられたが、この両本部は移転計画の確定、その部内への徹底、効率的な実施方法の策定等に重要な役割を果し、

特に実施本部はその末端で各部課の実施班に つながり、移転作業の実戦力となり、移転に向けての部内の志気高揚にあずかって力があつた。他方、夏頃から、引越し業務を担当する日通側も移転本部を旧庁舎の一画に設け、その後は高・地裁と日通とがそれぞれに移転計画を持ち寄り、相互にフィードバックを繰り返して計画を練りあげ、十月には高・地・簡裁民刑各部、事務局各課、検審別の移転日程案も出来上がった。

ところで、移転作業の規模は新庁舎に搬入すべき裁判記録、図書資料、什器備品の類は不用物を事前に相当処分しても、なお膨大な量にのぼり、実施本部の試算によると、例えば、記録類は棚に並べた形で延約十四キロメートルに達すると想定された。こうしたデータから、引越しに要するコンテナは、四十×四十×八十センチのもの約三万三千個、使用する四トントラックは延約三千四百台、従事する日通作業員は延約六千人と計算された。ちなみに、三万三千個のコンテナを積み上げると、富士山の約三・五倍、東京タワーの約四十倍の高さとなるというのであるから、この一事をもつてしても、この移転作業の規模が推知されよう。まさに裁判所始まって以来の大移転作業であった。

— 移転当日 —

十一月二十一日、高裁会計課の移転を皮切りに、以後高裁、地裁の民刑各部、事務局各課の移転が次々と行われた。報道機関もこの

引越し風景を取材しようとして、引越し初日には新庁舎上空に各社のヘリコプターが飛び交い、また、正面玄関前には初荷のトラックを待ち構えてカメラマン達がカメラの放列を敷いていた。ところが、記念すべき第一号のトラックは何と数脚の中古の机等を積んだだけの二トン車であった。これでは絵にならないという報道陣の要望を容れ、渋る日通の現場監督に頼み込んで搬入順序を変更し、コンテナを満載した数台のトラックを連ねて入構させ、しばしば各社のカメラマン達にサッピスされた。爾後三週間にわたって移転作業が続けられたが、この三週間の移転期間中の裁判事務、特に開廷審理をどうするか移転計画樹立の際から大きな問題となっていた。大勢の作業員が机、応接セット、ロッカー等を運搬しているその最中に訴訟関係人らが入り出すというところでは、引越し作業の妨げになるばかりでなく、危険でもあった。更に、移転中に万が一にも裁判記録が紛失するようになるとが一つはならないところから、実施本部としては思い切ったこの期間の開廷を極力見合わせて貰うという方針を決定し、高・地・簡裁民刑各部の裁判官にお願いした。十一月二十一日から十二月十一日という期間はまさに年末のかき入れ時ともいえるべき時期であり、この期間中開廷できないということは各部にとって相当の痛手であつたと思われるが、高・地・簡裁の各裁判官ともいづれも快く承諾され、協力して下さった。この協力を

得たことが移転作業をどれだけ円滑に進捗させたか測り知れないものがあり、改めて感謝する次第である。

十二月十二日新庁舎正面前庭には日の丸が翻り、大会議室においてまず高裁が、次いで地裁がそれぞれ開庁式を行い、この移転大作戦はまったくの無事故でめでたく幕を閉じた。

3 新庁舎点描

— シャンデリア —

誰しもご承知のとおり、この新庁舎の敷地は最高裁旧庁舎の跡地であり、わが国司法部にとつてはきわめて由緒ある地である。この地に高・地・簡裁合同庁舎が地裁刑事部をも含めて新設されるまでには、関係者の並々ならぬ苦勞があったと聞いているが、最高裁旧庁舎の名残りを今にとどめるものが玄関ホールにシャンデリアである。このシャンデリアは最高裁旧庁舎と同じく玄関ホールを飾っていたものであるが、昭和四十九年の庁舎解体時に取りはずされ、以後最高裁経理局の手で大切に保管され、十年ぶりに再びさげんたる光を放つに至った。重さ一トン、直径約二・七メートルのこのシャンデリアは、新庁舎のために特に読んだかのように玄関ホールと調和し、その豪華さに立ち止まって見上げる人も少なくない。

— 櫓 —

新庁舎正面前庭にある大櫓は櫓である。横浜市戸塚区から運ばれてきたものであり、無

事根づくかどうか懸念されていたが、五月に入って勢よく新芽を吹き出したので、もう大丈夫である。これからは年ごとに枝を伸ばし、葉を繁らせ、更に巨木に育っていくことと思うが、警視庁の楠、街路樹のマロニエ等と並んで、霞が関界隈の名物となる日を待ちたい。このほか、新庁舎を囲む木々には、カイヅカイブキ・サクラ・ヤマモモ・マテバシイ・モクセイ・ナラ・クスギ等々がある。植込みに密植されたツツジ・ツバキ・トベラ等の小灌木まで数えれば、構内の樹木は全部で約六万本にも達するという。今年は年初の度重なる大雪で植えたばかりの灌木類に相当の被害が出たのは痛々しかったが、植替えもすみ、来春には更に見事な花を咲かせ、構内を彩るであろう。何はともあれ、周辺の緑化に力を注いだことは、新庁舎の自慢の一つである。

— 百メートルの直線コース —

新庁舎の南北に走る中央廊下は百二十六メートルの直線コースである。土曜の午後職員が退庁して静まりかえった中央廊下に立つと本当に長いという実感が湧く。短靴を運動靴に履き替えてちよつと駆け抜けてみたいくらいである。これが廊上ともなると、更に凄く危険防止のために常時閉鎖されているのが残念だが、まるで大型タンカーの甲板のようでもある。ところで、庁舎内の廊下の総延長距離は約十キロ、このうち守衛さん達の

限なく異常の有無を点検する。新庁舎の安全管理は計器類に頼るところが多いが、危険物の発見、火の不始末、不審者のチェック等に関し、この守衛さん達の地道な動静監視は貴重である。

— 新庁舎からの眺望 —

新庁舎高層からの眺望の素晴らしさには形容しがたいものがある。東側の窓からは、まず日比谷公園の四季の彩りを楽しみ、更に、富国生命、第一勧銀、大和生命等の高層ビルとの合点間から遠く東京湾を眺め、晴れ渡った日には遙か君津、木更津の石油タンク群や房総半島まで望みすることが出来る。合同庁舎五号館等をも含めてこれらの高層ビルに煌々とあかりのついた夜景の味わいもまた格別である。なお、銀座のはるか彼方に東京デイズ・ニランドが見えることに皆さんお気づきであらうか。赤白だんだらの二本煙突の右方に白くピラミッドのように光って見えるのがスベリス・マウンテン、その左の灰色の塔のような形をしているのがシンデレラ城である。双眼鏡で見ると、その姿は更にはつきりする。

次に、西側の窓からは何となく富士山の麗姿であらう。これに丹沢山塊、更に秩父奥多摩の山々が連なるが、それらを背景に最高裁、国会議事堂、ビルの陰になつていのが首相官邸の一部と三権の府が一望の下に眺められるのも興味深い。富士山を静岡県、山梨県に数え、筑波山を茨城県に数え、一

都十県の東京高裁管内のうち、実に 都七県を見渡すことができるわけである。「そういえば、どうも近頃誰かに見られているような気がした。」と冗談を言っておられた管内の所長さんもある。

4 庁舎管理について

— 縦のものを縦にする —

「縦のものを縦にしない」という言葉もあるが、横のものを縦にするとうなるかがこの新庁舎の庁舎管理上の問題点であった。旧庁舎においては、高裁庁舎、地裁第二民事庁舎、地裁刑事庁舎がいわば横に並んだ形で平面的に配置され、特に要警備事件や報道陣の関心を集めるような事件の多かった地裁刑事庁舎は独立性が強く、例えば、ロッキード丸紅ルート事件の判決言渡りともなれば、地裁刑事部全体が法廷を休んでこれに協力することも可能であった。また、出入口も高裁と地裁とは別個であり、高裁庁舎と地裁庁舎との連絡通路を閉鎖すれば、地裁での騒ぎは高裁にはほとんど影響しなかったといつてよい。

ところが、新庁舎においては、高裁、地裁の民刑各部の法廷が上下に位置し、正面玄関、東玄関等の出入口もすべて共通のものとなった。そうすると、たとえ、どんな重要な要警備事件が開廷されようと全法廷を取り消したり、あるいは出入口を一所に限定して他を閉鎖するといったことは不可能ともいつてよいし、

わけてある。現に新庁舎において執務を開始した直後にある事件の判決に対する抗議行動というところで押しかけて来た一団の人達に一階廊下の南側部分を午後七時すぎまで占拠されてしまった。

発生した。これらは、新庁舎における庁舎警備に対する一つの試金石であったといつてよい。こういつた基本的な問題点は解決されようもなく、今後の庁舎管理において絶えず問題とされてこようが、に要警備事件専用の法廷を用意し、要請行動に 대응するため、に面会所を設け、その他傍聴券交付場所について工夫をするなどさまざまな対策を講じ、また、高、地裁民利訟廷、高裁管理課、地裁警務課等の密接な連携、相互協力もあって、その後は比較的平穩に過ぎるようである。

— 高裁管理課のこと —

最後に高裁管理課について一言触れたい。手前味噌になるかも知れないが、高裁管理課のことを抜きにしては、この新庁舎について何一つ語ることはできないであらう。それまで高裁会計課及び地裁経理課に分かれて配置されていた電工、汽かん士、守衛、庁務員、電話交換手の人達を高裁に集め、あわせてこれに管理部門を加えて管理課を設け、合同庁舎の維持管理に当るという基本的な構想は、

中村修三司研教官が高裁事務局長時代に言い出されたものであったが、新営工事の着工以前からこのような構想をもたれたということにはまさに炯眼であったといふはかない。地上十九階、地下三階延建築面積十三万六千平方メートル、そこに働く職員は裁判官を含めて約二千二百人、訴訟関係人ら一日の推定来庁者が六千人から七千人にも達するというこのマンモス庁舎のメインテナンスを高裁、地裁に分かれたままの組織で担当することが困難であることは実際にやってみて痛感されることである。新庁舎の庁舎管理は、高、地裁の各専用部分についてはそれぞれ高、地裁が単独で、また、両者の共用部分については高、地裁が共同で担当することになっているが、この高裁管理課となると、その守備範囲は新庁舎の全域に及び、機械設備、空調、エレベーターの維持管理はもとより、前述の庁舎警備や清掃、電話交換のすべてを担当しているのであつて、まさに新庁舎の運営を支える緑の下力持ちといつてよい。新庁舎はわれわれの貴重な財産であり、これから何十年にわたって今と同じような姿で守っていかなければならない。そのためには日常使用する職員の愛情と心遣いが何よりも必要である。ぜひとも高裁管理課に対する協力をお願いする次第である。

(東京高裁事務局長)

建物概要と仕上材料について 深谷 健雄

まず、この建物の設計上の特徴から述べてみます。

本庁舎へのアプローチは、西側の桜田通りに面した正面玄関を歩行者用とし、東側の橋内道路に面した東玄関を車での来庁合用として、人と車の分離を図りました。さらに南北に副玄関を設けるとともに、

建物は、全体一ブロックの中央コア形式で対称平面となっており、訴訟関係人が下層階で目的が達せられるよう、法廷、調停室等を一階から八階までに集中しています。

訴訟関係人と、裁判官、書記官等の裁判所職員及び身柄拘束被告人の三者の動線も完全に分離し、法廷の出入りにあたっては、それぞれに

を配置しました。法廷は、出廷訴訟関係人の増加に対応できるように、合議法廷の検察官・弁護人卓子を各三人用とし、大合議法廷は、それを二列設け各六人用としてあります。身障者に対しては、玄関スロープ、自動ドア、身障者用操作盤付エレベーターを設けるとともに、法廷傍聴席に専用のスペース

を確保し、法廷階にはを設置してあります。

建物は、高層部(九・十九階)が三スパン、中層部(三・八階)が五スパン、低層部(一・二階)が七スパンで下層にいくほど大きくなって、安定した形状となっています。

中層部外壁には、スリットを設け、強風時の附近に与える影響を少なくすると共に、敷地の南西角地には重点的に植樹をおこない、南側区道の街路樹植栽とあいまって、風から歩行者を保護し、かつ構内の他の樹木と共に緑化に力を入れ、附近の環境との調和を図りました。

次に仕上材料について話してみたいと思います。

タイル、石、煉付材、クロス等は、この庁舎の基本をなす仕上材料なので、長期間に亘って色合・形状等を調査、検討し、膨大な数量を出来るだけ同一品質で確保するように努めました。

外壁タイルの色については、周辺の環境と調和するものとし、暖かみがあり、なお且つ親しみやすい、やや淡いアイボリー調の無彩色を基本色としました。

しかしこの基本色を焼物のタイルに表現するには、かなりの回数の試験焼を必要としました。

同じ焼物タイルを焼いても、粘土の調合、置かれているタイルの位置、温度の調整、クオリティ等によって色合が微妙に違ってきます。何回かの失敗と検討を重ねた結果、ようやく現在の外壁タイルの色に決まりました。

外部の柱型、壁には国産の花崗岩(磯庭石)を使用しました。この石は近い所では、国会議事堂と竹橋会館の外壁に全面的に使用されています。暖かみのある、しっとりとした色合を持った石ですが、やはり同じ色調の石を揃えるのに山元では大変苦労したようです。

内外部の床及び、照障には、黒ミカゲ(スプリングポックイン)を使っています。この石は、色むらがほとんどなく、また大量に輸入されているので最近出来た建物では良く使われています。

玄関ホール、壁は、大理石(トラバーチン)を使用していますが、この壁で注意した点は、グレーの横縞の石目をいかに効果的に示すかにもバランス良く配列するかに留意しました。とにかく数量が多い上に、必ずしもこの石目が出るとはかぎらないので、工場で何回も組合せを変えながらやっと現在のパターンに落ち着きました。

大合議法廷の背面壁は、やはり大理石(キヤロペルリーノ)です。この大理石は、遠目

には変化もなく灰色がかった白色にしか見えませんが、近くで見ますと大理石特有の細い縞のいりまじった模様があり全体として端正な感じのする石で、平滑な仕上げとあいまって、ある種の緊張感があるように思いますが、如何なものでしょうか。

煉付材として合議法廷の背面壁にローズウッド、単独法廷のそれにはウォールナット、法廷家具は、大合議法廷にローズウッド、その他の法廷にはチークを使用しています。いずれも自然木であり、数量が多いため、良い木目を揃えるのに一年近くかかりました。

特にこの材料は、すべて輸入に頼っているため、良材が入ったと聞くと、関東だけでなく関西にも足を延ばし、材料の確保にあたりました。今後これだけの品質、数量を集めるのは、むずかしいだろうといわれています。壁張りしたクロスのうち、大合議法廷と大会議室には、京都で織った「寂光織」を採用しています。

このクロスの特長は、細い糸で密に出来ているので、特に無地の部分は肌ざわりが滑らかであり、柔らかな色合とともに暖かさも感じ

新庁舎の電気設備計画の

基本方針と特徴

新庁舎の電気設備計画は、省エネルギー、省力化、防災対策に重点を置き、運転、保守管理のしやすい、有効かつ使い易い情報設備

浦上 裕雄

の設置を基本方針としました。

省エネルギーと省力化
庁舎内の空調・衛生・照明・受電電・自家

じられ、重厚感のある落ち着いた雰囲気を持つています。それはこのクロスの織り方が朱子織なので、タナ糸とヨコ糸の交わりがかなり少なくできるため表面が平滑となり、糸の密度を高くして布地自体を深みのあるものに出来るからです。

素材は、タナ糸がベンベルグ、ヨコ糸はレーヨンで糸の太さは普通糸の四割程度しかない約〇・二mmです。即ち一平方メートルの中に、タナヨコ合わせて一万本近い糸が織りなしているのですから、密に仕上がるわけです。

柄は、大合議法廷では、鳳凰と龍を、大会議室は、ススキを図案化したものです。

クロスの色は、原糸の時にタナ糸とヨコ糸を別々に染色するので、微妙な色の違いでも織り上がると、色合、雰囲気、がらつと変わるため、これまた試験を何回もおこない、ようやく工期に間に合ったのです。

以上主たる仕上材料について話を進めてきましたが、他の材料についても同じような経過で、色合や品質の確保に努め、なんとか無事完成を迎えられました。

(最高裁総務局管轄第一設計班長)

発電・防災等、諸設備の統括運転管理と、省エネルギー、省力化を図るために、ミニコンビニターとマイクコンピュータを併用しました。

約四六〇〇点の監視に必要な中央監視制御システムを、の監視盤に設け、中央処理装置の他、操作卓、各種タイプライター、電力グラフィック盤、エレベーター運行盤、防災表示盤等を附加して統括的に運転管理してあります。

この中央監視制御システムで、変圧器の台数、電力アランド、力率改善制御を行って、省エネルギーを図るとともに、空調動力・共用部照明等のスケジューリング、停電処理及び、日月報記録の作成、電力・水道使用量の積算並びに、設備保全のための警報処理等を自動的に行って、省力化を図っております。

その他に、低損失形機器の採用、夜間誘導灯の二斉消灯ができる装置を採用して、省エネルギーを図っております。

防災対策

防災面では、全館に煙感知器、スプリンクラーを設置して、火災の早期発見、初期消火の充実に努めるとともに、通報、防排烟、避難誘導、本格消火等、必要な一連の対応を行うために、に防災センターを設置し、火災報知装置、運動制御盤、非常放送、ガス警報装置等、防災関連装置を配置して、制御は操作卓で監視は操作卓のCRT(ブラウン管)と、庁舎断面グラフィック盤、関連機器表示

警署で防災設備の集中管理をしております。
また、各設備機器の基礎、配管、配線、支持金物等、すべてについて耐震対策を行い、地震時の設備機器の倒壊、破損、落下を防ぎ、併せて機器の絶縁油等による火災の発生、延焼拡大を防止するために、乾式重電機器を採用して、二次災害防止も図っております。
運搬・保守管理のしやすさ

建物の用途から、電気設備は事故等により生ずる障害を最小に止めるために、電力幹線の引込みについては、本線、予備線の二回線受電方式を採用して、電力会社受電所事故発生時に、すぐ対応できるようにしております。
一方、庁舎内電気設備については、変圧器等、主要重電機器の複数台の分割設置、高電圧幹線の二回線配線等によって事故発生時及び、作業時の停電範囲を抑制すると共に、機器の交換作業も容易にしております。

また、監視室に設置した中央処理装置に、監視機能を付加させて、監視機器の警報発生時に、警報メッセージをCRT（ブラウン管）に表示すると同時に、プリンターで印字記録する等、一連の機器の保全処理を行っております。
その他、機械室の機器も規則正しく配置して、保守作業が容易にできるように配慮しました。

執務に必要な情報設備
従来裁判所庁舎に設置された拡声、表示、警報等、情報設備を根本的に見直し、各部門

空調設備（空調設備）

新庁舎の空調は、事務階がファンコイル併用方式で、法廷階が可変風量（VAV）方式となっております。

事務階のファンコイル併用方式は、インテリゲンシーを空調機で、ペリメーターゾーンをファンコイルで行う空調方式で、室の温度に合わせて手動で自由に調節することができ

ます。
法廷階の可変風量方式は、室の負荷変動に伴って吹出風量が自動的に変る空調方式です。

また、特別に、除菌室系統、食堂系統、厚生室系統は、空気汚染防止や悪臭除去のために室内空気の再循環をやめ、新鮮空気のみで空調を行う方式となっております。

次に、冷暖房の熱源は、都市ガスを用い、ボイラーで蒸気を生産させ、その蒸気により暖房はもちろん、冷房をも行うもので、在来の電気式冷凍機による冷房時の電力料金と比較すると、夏のガス料金は、夏期割引と非課税により、割安となるため経済的です。

衛生設備

事務階の小便器は、一般的な押しボタン方式ですが、地下一階から八階までの小便器は、その使用をセンサーで感知し、計算し、自動的に洗浄水を流す方式で、小便器を使用する外来者が、水を流すことを忘れることによって生ずる悪臭の発生と、排水管のスケール防止のために採用したものです。

の事務処理の流れに合った、使い易い拡声、表示、呼出、警報等の情報設備の設置に心掛けました。その他に、設備に簡単に、多目的の会議に有効に対応できる大会議室拡声設備を設け、庁舎（高層、大規模）の管理用と数多い法廷の警備に、工業用TV、無線連絡設備を備えたとともに、報道用として、TV中継設備を設置しました。

新庁舎には、電灯、コンセント、動力設備等、一般電気設備八項目、受変電、自家発電設備等、重電機設備等、四項目、電話交換、電気時計、中央監視制御設備等、弱電設備十三項目、防災センター、非常照明等、防災設備五項目、その他、エンベーター設備等、合計三十一項目の電気に関する設備があります。これらの設備は、新しい技術、装置の採用と同時に保安、保全に万全を期してあり、東京都をはじめ、東京通商産業局、東京消防庁、九の内消防署、日本電信電話公社の厳しい検査を受けて完成に至りました。

なお、機器の色調、形状については、建築意匠との調和を図っております。

新庁舎アラカルト

玄関ホールのシャンデリア

新庁舎の機械設備について

新庁舎には、多種多様の設備が設けられていますが、特に、機械設備について代表的な

最高裁判所旧庁舎の玄関ホールに、取り付けられていた、シャンデリアを再使用することになり、分解、研削、鍍金、部品の交換を行った結果、すっかり美しくなりました。重量約一トン、径二・七五メートル、高さ二・四メートルと大形であり、ガラスの枠等はそれぞれ寸法の異なる手作りの品物で、当時（昭和二十二年）の価格で、百万円だったそうです。

二 航空障害灯のない新庁舎

地上または水面上六十メートル以上の物件の設置者は、その物件に航空障害灯の設置が航空法で義務付けられておりますが、新庁舎には、高層建物である証しの、赤色点滅の航空障害灯がありません。近隣（二百メートル以内）に障害灯のある物件（警視庁、中央合同五号館）があり、新庁舎の高さが九二・〇メートル（百メートル未満）のおかげで、免除（申請要）されました。

おわりに、新庁舎の設計計画段階から完成迄の長期間、諸先輩の方々、東京高裁、地裁、簡易裁判所の職員の方々から、多くの貴重な御意見と御指導を戴き、完成致しました。お礼申し上げます。

（最高裁総務局管轄課電気設備班長）

菅谷 健

ものを挙げ、その概要、特徴について述べたいと思います。

排煙設備は、火災の際人間を煙から守るための設備で、安全かつ、円滑に避難するためには不可欠のものです。

裁判所庁舎で、全館にわたって排煙設備を設けたのは、本庁舎が初めてであります。しかも、大部屋方式の高層建築と異なり、小部屋方式の高層かつ大規模なものである本庁舎の場合は、他に実例が見当たらないため、関係各庁の係官とともに、法令の検討、施工法の適否について協議を重ねるなど、苦勞の結果生まれた設備です。排煙ファンは、避難通路用として四台、一般室用として五台設けてあります。

機械設備の特徴

新庁舎に設置された機械設備関係の特徴は省エネルギー・省資源対策と耐震対策が挙げられます。

省エネルギー対策としては、事務階の排気熱を回収して外気負荷を減少させ、暖房時のランニングコストの低減を図り、冷暖房に可変風量方式を採用し、室内の吹出風量の変化によって送風機のモーターの回転数を変え、搬送動力を有効に使う回転数制御、更に始動時に、自動的に外気（新鮮空気）を空調機に入れないようにする外気導入制御、又、ボイラー・冷凍機・冷温水ポンプの効率的運転を図る台数制御などを導入しています。

省資源対策としては、洗面器、厨房を含む流しの雑排水等をろ過し、消毒して大便器、小便器の洗浄水として再利用する排水再利用

処理装置（中水設備）を設け、更に、便器は節水型便器を用いて、水資源の有効利用を図っています。

耐震対策としては、大地震時における設備機器の脱落、転倒及び、これらによる二次災害を防止するための耐震設計、施工をとり入れ、万全を期しています。

おわりに、暖かいご指導を賜った諸先輩、ご協力いただいた施工関係会社各位に深く感謝の意を表します。

（東京高裁管理課主任技官）

現場雑感

新井 勇 一

昭和五十四年七月二十一日に、鹿島三井・住友建設工事共同企業体のもとで、建築工事が着工されました。これから私が述べることは、その建築工事の最初に手がける工事で、今や壮大に完成した建物の下、即ち土工事にまつわる思い出といったものです。

さて、当該新設敷地は、西面と南面に帝都高速度交通営団の地下鉄が走っており、ことに南面の丸の内線のトンネルは、現場敷地内に約五メートル食い込んでおり、しかも地下鉄建設時に埋め戻した山砂が十分固定されていないという状態でした。新設現場の土工事に入るにあたって、この山砂の崩壊を防止するために「日鋼打ち横矢板止め」工事を施工する必要に迫られ、八月中旬より日鋼杭打ちを開始することにしました。ところが、杭を約四・二メートル程打ち込んだところで、打込み不能となる層に当たってしまいました。早速、その障害物を確かめなければならなくなり、敷地内の敷か所にボーリング機

で探掘りをしましたところ、最高裁判所旧庁舎（大審院、控訴院及び地方裁判所の庁舎）基礎下全面に、地表面下約四・二メートルを表面とするコンクリートが打設されていることが確認されました。このことは全く、予期せぬ出来事であり、しかも工事の最初の段階にただけに驚きました。直ちに調査にとりかかることになり、旧三裁判所新築の際の基礎工法に関する調査を企業体に依頼することになったわけでした。幸い、東京大学生産技術研究所より各種文獻入手することができ、その一部は「建築雑誌」第百三十二号（明治三十年二月号）に「新築三裁判所庁舎建築の大要」という題で旧三裁判所庁舎建築の工事主任妻木頼賢先生（明治二十一年ドイツから帰朝した内務省技師）執筆の次のような一文が載っており、また「新築三裁判所の敷地は日比谷練兵場内にして西日比谷町に面したる中央の一部分なり而して練兵場の地質たる概ね軟和にして数十尺を下るも堅層に達す

るを得ず唯裁判所敷地は幸にも地平線を下る凡五「メートル」餘に至り岩層（土丹岩）に達せり然れども岩層の全面は往々凸凹なるに依りこれを平坦ならしめんがため地平面を下る五「メートル」をセメント入練砂利を以て均一なる堅層と爲し其上部に砂地形を施し且つ砂の横断を防かんがため建物外壁面より凡三「メートル」の距離に堰板を以て境界を造り而して建物下全體を厚二「メートル」に川砂を填充し人工及び水の作用を以て固結せしめたり又上部に練砂利地形を施せり該幅員は練瓦壁の厚薄及び其重量に準じ狭きものは九十九「センチ」より廣きものは五「メートル」に至る厚は悉く一「メートル」五十「センチ」とす。

以上の記述を検討した結果、地盤改良のための割栗地形ラップコンクリート（厚さは土丹層の深さにより大きく差あり）を打設し、その上に砂を約二メートルの高さに客土した事が判明しました。このことから現場では、土工事の施工計画を一部変更し、コンクリート部分の解体の工法について企業体と慎重に協議を重ねました。前述しましたようにこのコンクリート障害物は、予期していなかったものだけに、契約工期への影響、工事中の騒音の措置等近隣官署への了解とりつけも含めて困難な問題が含まれていたのです。しかしながら、この障害物撤去工事は、昭和五十五年一月末から解体を始め、約五千方メートルの「がら」の場外搬出まで企業体の技術力

で約 か月という短期間で二月末に完了しました。

さて、土工事全体としては、前記のような予期できなかった工事を加え、昭和五十四年十月中旬から始めて、最終的に十九メートル九十六センチの深さまで掘削し、昭和五十五年七月中旬までに、約十七万立方メートルの場外搬出物（破碎したコンクリート、碎石、玉石、土、砂）を搬出して終ったわけですが、この多量の搬出物の搬出は、現場関係人一同最も苦心させられた問題でした。その主なものは、まず「捨て場」の選定確保という問題です。この問題は捨て場までの距離及び運搬時間等と道路交通量の関係等いくつかの要素を総合的に検討し、最終的に東京都が管理する公認捨て場の葛西沖と羽田沖の二か所ということになりました。次の問題は、搬出物の有効な搬出と、運搬車の管理の問題です。捨て場の利用可能な時間は両捨て場共、午前八時から午後五時までと制限され、この制限時間の有効利用のための現場構内での円滑な運行車路の設定、また、積載完了の車輛が構内から公道に出る際の車輪等に付着している土砂等を洗い落す洗車設備の各ゲートへの設置等、現場周辺の人車の通行に迷惑をかけないよう運搬車の管理に十全を期するという事です。これら都心の工事として当然受けなければならぬ各種の制約は、工期等をにらみながら乗り越えなければならなかった大きな問題でした。参考までに申し上げますと、前

記搬出物の運搬車として、最大積載量十トンのダンプ車を使用しましたが、一台に積載可能な量は約六立方メートルです。この、車輛の総台数は二万八千三百三十二台ということになります。このダンプ車を仮に縦に並べたとしますと延長で二十一万六千七百余メートル。東海道線の長さに置きかえたと、実に、東京駅から静岡県の金谷駅付近に達するという膨大な数の車輛管理だったわけでした。この車輛管理に忙殺されていた折、ふと全く別のことが私の頭をよぎったことがあります。

この多量の搬出物の中に客土として入れた二万六千方メートル程の川砂が混じっているわけですが、この川砂をどのように三裁判所新築当時運び込んだのだろうかという事です。勝手な想像ですが、川砂だけに、工事用の砂、砂利の採集可能な場所としては、現在の二子多摩川あたりではなかったであろうか、もしそうだとすると、当時は玉川電車は開通していませんから（玉川線は道玄坂上と玉川間の全線開通は明治四十年）牛馬車等で、坂の多い道路を通過して日比谷の現場まで運んだのではないだろうか、そして、場内は人力で「モッコ」や「バスケ」を使って所定の所に入れたのだろうか。今日のように自動車等機械力を駆使しての工事でないだけに想像を絶する苦勞があったのではないか。ダンプ車が次から次へと忙しなく出て行く後姿を追いつながら約百年前の往時へと思いを走らせた

のでした。

以上今や立派に完成した建物の下にかくれて見えなくなってしまう土の部分の苦勞話の一端を思い出として披露させていただきます。

最後に、この工事の総括監督を委ねられたわけですが、二万トンの鉄骨を使用した高層大規模な建物で、工事の最盛期には一千名近い人が就業し、困難な作業の連続でしたが、四年十か月の長期工事であったにもかかわらず、幸いにも無災害で終ることができました。これも工事関係会社の日常の安全規則の研修及びその遵守、安全設備の充実、各会社間の円滑な連携等によるものと深く感謝の意を表してペンを置くことにします。

（最高裁管理局管轄課工務検査官（総括監督職員））



春光

宇野竹甫

(東京地裁民事二十、部書記官)

春の雪受けて眩しき新庁舎

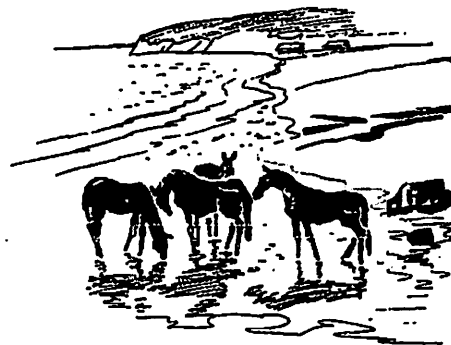
初時雨泰然と受け庁舎建つ

梅雨空を支えて高し新庁舎

輝きて万緑に映う新庁舎

春光をはねて白堊の十九層

重厚の白き礎万緑に



調停事務と新旧庁舎

笠原 慎一

私に表題の寄稿の依頼があったが、私は調停委員として、新庁舎を使って調停を行った実績がなく、右表題の記事を書くには極めて不適任であり、なおまた新旧庁舎に関する知識も乏しいので、お断りするのが至当であると考えたが、その職責上お断りすることもできず、お引き受けしました。

事実と相違し、また誤解もあるかと存じますが、その点は平にご寛恕願います。

一 新庁舎と旧庁舎

私は新庁舎を昭和五十九年四月二十九日建築工事を完成し、去る昭和五十九年五月三十一日に落成式を挙げた、東京高等裁判所、東京地方裁判所、東京簡易裁判所合同庁舎の調停関係施設をいい、旧庁舎とは東京地方裁判所の民事第二十二部が担当する民事調停事件を処理するため設置した調停関係施設及び東京簡易裁判所の調停関係施設をいいます。

二 東京地方裁判所旧庁舎

旧庁舎は東京地方裁判所第三新庁舎と呼ばれ、その一階全部が調停に充てられていた。その施設の内容は調停室十二、判事室、調停委員室、調停事務室、原告(申立人)及び被告(相手方)控室各一などがあった。右調

停施設は全般的に同部の取扱件数、調停委員、調停関係当事者等の数からみてまことに狭小で調停事件の処理上いろいろの点で不便を免れなかった。

とくに、調停室は数は十二あるけれども、法廷を取り毀し、そのあとを十二に板で間仕切りをし、出入口にドアを取り付けた全くのバラックで、天井はなく吹き抜けとなっていた。

右調停室で少し声高に話しても隣の調停室に聞こえ、調停室が満員かそれに近いときは、騒音のため調停手続の進行を阻害されることも珍しいことではなかったが、右調停室が応急の改造庁舎のこととして、その改善は新庁舎の建設まで見送られたようであった。

三 東京簡易裁判所旧庁舎

旧庁舎は新庁舎の敷地の北端に小規模ながら、その裏側の法務省及び最高裁の建物と同様の赤煉瓦造の洋風の三階建ての実に華麗な建物であったが、戦災により赤煉瓦を残し、全焼した。その後間もなく復興し、昭和三十七年三月三十日に瀟々として東京地方裁判所、東京簡易裁判所合同庁舎が竣工するとともに民事刑事両係が右合同庁舎に移転し、旧庁舎は全

部調停係の専用になった。その施設の内容は一階受付、調停室四、控室一、二階調停室三、調停事務室一、控室一、三階判事室調停室四、そのうち二室はそれぞれ二つに衝立て仕切られていた。右旧庁舎には調停室は十三室あったが、同階は東京地裁管内の最大の簡裁であり、その取扱件数等から旧庁舎は最も手狭に感じられ、新庁舎の完成が待たれていた。

四 新庁舎(合同庁舎)

新庁舎は最高裁の跡地に建られた我国裁判所中最大規模で地上十九階、地下三階、延床面積十三万六千八百一十一平方メートルで近代建築及び設備の粋を集めた機能的に整備され、かつ構造美を兼ねる現代最高建築物といってもけつして過言でない。東京地裁及び東京簡裁ともその三階がその新庁舎にあてられており、地裁はそのほぼ中心から北半分の東側、簡裁はその西側と区分されている。調停室は前者は二十一室、後者は十九室あつて、数においては旧庁舎と同数である。けれども、調停室の床面積は新庁舎がはるかに広い。またその内装、机、椅子などの調度品等も上等のものが備えられ、冷暖房も完備し、特記すべきは調停室と当事者控室との間に連絡用の直通電話が架設され調停処理上機動性が配慮され、新庁舎は旧庁舎に較べ総ての点において進歩向上していることが認められ、私はその御努力に対し心から感謝申し上げる次第であります。

(東京民事調停協会連合会会長)

執行官と新旧庁舎

橋村 春海

待望久しかった新庁舎が完成し、移転してからすでに半歳が過ぎた。現在東京地方裁判所執行官室（以下「執行官室」という。）の執務環境は実に快適である。その場所といい、事務室の広さといふことに申し分がない。おそろく全国どこの執行官室にも負けない、さすが東京ならではの執務環境ではないかと思う。

執行官室は、幹事長室、総務部、執行部、不動産部（現況調査室を含む）、執行官面接室及び不動産等売却場の各室から成り、そこで執行官二十五名、事務職員二十九名が執務している。売却場のみ三階にありその余はすべて二階にある。二階の各事務室は、面接室を除いて西側廊下に面し、一箇所に集中してゐる。したがって相互の事務連絡が円滑にできるし、非常に能率的である。さらに特筆すべきことが二つある。

その一は、執行官室が執行官事務と密接な関係を有する民事第二十一部（不動産等の執行裁判所、民事第九部（保全処分執行の命令裁判所）執行官事務に關する保管金の出納を掌る出納第二課、それに保管金の収納を掌る日銀代理店等の関係機関に近接した場所に位置していることである。このことは、執行官

事務の能率的運営に利するところが極めて大きい。

その二は、旧庁舎では地下一階にあった執行官面接室及び不動産等売却場が、新庁舎ではそれぞれ二階と三階に変わったことである。

従来地下一階にあるということ、その周辺に集まる多数の関係人、加えてそれらの人々の職業の種類あるいは執行官の仕事の内容などから、なんとなく暗い印象をぬぐえなかった。また執行官としても非常口も換気口もない環境の中で執務することは決して愉快ではなかった。それが十分な広さと明るさを持った執行官面接室、法廷と同じ形式と内容を整備した不動産等売却場が与えられたことは、まさに特筆に値する。

執行官室は仕事の性質上毎日外来者が多い。その大部分は執行官に面接を求める債権者、同代理人等である。これらの人々は午前中の一定時間に集中する。旧庁舎では待合室がなかったため、地下一階の面接室前、地上一階廊下そのほか適宜の場所に分散していた。そこで庁舎管理上いろいろと問題が指摘されていた。新庁舎では待合室が設けられたので、分散した待合状況は見られなくなり、

庁舎管理上はもちろん庁舎内の美観保持の点からも好ましい状態となった。

執行官法が施行されてからすでに十八年が過ぎた。また民事執行法が施行されて四年目にはいった。しかし、執行官の仕事の実態はまだまだ一般によく認識されていない。したがって執行官の評価も定まらない現状である。評価を高めるには何よりも実態を正しく認識してもらうことが肝心ではあるが、一面物理的あるいは外形的状況も大事である。つまり、執行官は裁判所庁舎内のどんな場所です仕事をしているかということである。かかる観点から新庁舎における執行官室の場所、執務環境などを見た場合、全体の中でどのように処遇されているか一般に十分理解してもらえると思う。

全国各庁から公用私用で訪れる執行官その他関係の方々は、各事務室及び売却場を見学して異口同音に賞讃し、そして一様に羨望する。何といつても東京地方裁判所執行官室は、全国執行官の指標である。よきにつけあしきにつけ注目される存在である。従来やもすれば執行官は、比喩的にいえば「陽の当たらない場所、ひそやかに執務している」というような印象があった。それが現在このような恵まれた環境の中で仕事ができることは、まさに幸いというほかはない。

関係当局の理解ある措置と配慮に深甚の敬意を表する次第である。
（東京地裁執行官室総務部長）



(旧高裁庁舎)



(旧地裁庁舎)

旧庁舎時代
を偲んで



本間 武
(嵐山園裁判事)

松本 厚
(東京高裁事務局総務課長)

ところにあつた元の東京拘留所に移りました。そして、終戦後、その年の十月に霞が関に戻つたのですが、東京裁判地裁は後に最高裁旧庁舎の図書館であつた庁舎に入り、東京区裁判事部は日比谷公園の中にあつた三階建てのバラックの建物に入つたのです。その後、昭和二十二年五月裁判所施設法により、東京民事地裁、東京刑事地裁、東京区裁は東京地裁一本となりましたが、民事部、刑事部として庁舎はそのまゝでした。私はその年の九月に最高裁刑事部（当時は刑事課）勤務となりましたが、そのときの最高裁は、民事庁舎にいて、当時は四階までの建物で屋上の二部に木造のバラックがあり、刑事局はそのバラック部分にありまして、

そして、昭和四十七年九月に東京高裁の刑事首席書記官として勤務した時は、民事庁舎でした。最高裁は、昭和二十三年五月大審院庁舎を修復した最高裁旧庁舎が完成し、そこへ移つたので、そのあとに東京高裁が入つたのでした。

高倉敏雄氏は昭和四年五月に東京区裁に入り、後に東京刑事地裁勤務となり、昭和十七年十一月から昭和二十三年九月まで近衛陸軍属員を香港に行方不明の海兵は松岡昭和三郎中将に千葉家裁事務局長として出るまで東京地裁裁判事部に入り、昭和三十三年に、事務局次長として千葉家裁に戻り、昭和四十二年一月までおろしたが入り、ついで、東京区裁の合庁庁舎の裏面玄関のあひだにあつた黄土色の縦瓦瓦葺シタク風の建物で、日本新聞さんの話に付は加たまじ、東京地裁刑事部は、

戦後昭和二十三年と同二十四年に刑事庁舎
同じ場所に木造の仮庁舎を建てて、最高裁旧
庁舎の図書館であったところから、東京簡裁
とともに移ったのですが、その後事件が急増
し、職員数も増加したりしたので、同じ場所



に東京地裁刑事部の庁舎を新営することとなり、建築期間中仮庁舎に入る必要が生じ、昭和
三十四年一月築地の勝鬃橋の手前にあった
仮庁舎に移転し、通勤が遠くなって二年間ほ
どは不便な思いで執務しました。そして、昭



相三十六年に刑事庁舎が完成して、そこに入
れたのですが、戦中、戦後を通じて、そこに入
った東京地裁刑事部は、漸く裁判所用として
設計された本格的庁舎に落着く迄とができて
たのです。皇居前広場やお濠に面し見晴らし
がよいので非常に落着いて引越したものでし
た。

片桐 私は、昭和五年から東京区裁に入り、
昭和十九年九月から昭和二十二年五月まで兵
役でいなかっただけ、昭和二十五年六月最前
裁総務局に出るまでは東京地裁民事部にいま
した。

東京地裁民事部は、民事庁舎ができる前は
大審院庁舎にいましたが、昭和十年四月に民
事地裁と刑事地裁とに分かれ、昭和十二年二
月に竣工した四階建の民事庁舎に入りました。
私は、区裁の庶務にいたっていたので刑事部
の日町の庁舎で仕事をしていたこともありま
す。

大審院庁舎などが戦災で焼けたときは、軍
隊にいらしたに聞きました。復員したときは
民事庁舎に戻ったのですが、大審院庁舎や司
法省庁舎（今の法務省庁舎）も焼けたため、東
京民事地裁は中野の東京高等学校校舎へ、引
越すことが焼けた小石川の窪町小学校へ、引
越すことになった年の暮の間に開庭したと
いふことがよく聞かれました。

大審院庁舎で係り勤務している時も、防衛演習が
何回あつて、職員は防空壕に反対の庁舎の
守る処まで大変警備を厳しくして、防弾小
銃の用を明水筒を作り、防火用の竹竿の先に
縄を巻いておけるものを用意して、防弾袋を
大量に用意したと聞いて取りました。演習の由

司会 本日は、お忙しいところお集まりいただき有難うございます。このたび東京高・地・簡裁の合同新庁舎が完成し、先日落成式も終わりました。新庁舎に落ち着いたのを機に、戦中、戦後いろいろな庁舎を移転して来たことや当時の様子など思い出話の特集記事にしたいと思っておりますので、よろしくお願ひします。

それでは、早速ですが、皆さんと旧庁舎との出会いなどからお話を伺っていきなれと思ひます。

なお、ここで、お話を進めていく便宜上、東京高・地・簡裁合同庁舎を新庁舎、東京高・地・簡裁民刑事部が新庁舎に移転する前にいた庁舎を民事庁舎、東京地裁判刑事部が新庁舎に移転する前にいた庁舎を刑事庁舎、戦災前には大審院がいた庁舎を大審院庁舎、戦災で焼けた大審院庁舎を修復して最高裁が利用した庁舎を最高裁旧庁舎と、それぞれ呼称したいと思います。

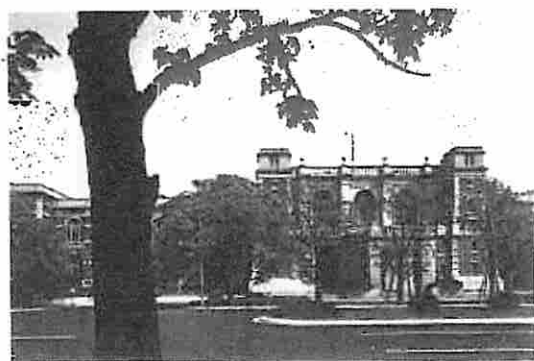
とありますのでご了承願ひします。

本問 私たちは、昭和十六年十一月新潟の裁判所から春日町にあった東京区裁を経て東京刑事地裁（東京地裁は、昭和十年四月東京地裁から昭和二十年五月裁判所法施行まで東京民刑事地裁、同刑事地裁に分かれていた）、勤務に事たつたのですが、その頃、東京刑事地裁は、ドイツ風の赤煉瓦で三階建の大審院庁舎の一階にありました。大審院は三階、東京控訴院は二階でした。その庁舎は、昭和二十年三月十日の東京大空襲で焼夷弾により赤煉瓦が残り、ただけという大被害を受け、東京刑事地裁は、春日町で同じ時に戦災を受けた東京区裁判刑事部とともに現在サンシャインビルのある

った時に宿直員が記録を風呂敷に包んで持ち出し、避難しようとしたけれども逃げ遅れる場所がなく、用水池の中に飛び込んで首だけ出していたということがあったそうです。

山口 私は、昭和十七年に沼田区裁から東京民事地裁勤務となり、庁舎は民事庁舎でした。戦災の話になってしまいますが、昭和二十三年三月十日未明の東京大空襲は、B29約百三十機といふ大規模なもので、霞が関の司法官衙もこの時にやられたのですが、一般の市街地も大被害を受け、交通も大混乱でした。国電は動いていたので有楽町から歩いて来ると、民事庁舎の後方に大審院庁舎の尖塔が見えたので、裁判所の庁舎は大丈夫だと安堵して登庁しましたが、現場に来て見ると中はもうすっかりだめでした。民事庁舎の屋上には、高射機砲があり、兵隊がいて、毎日、軍歌が聞こえたのですが、砲が射てなかったりにも激しかったため、砲が射てなかったり。民事地裁は、同じ時に司法省が焼け出されて民事庁舎に入ることになったため、昭和二十年四月十日に区裁民事部とともに中野の東京高等学校校舎に移りました。しかし、その五月二十五日の空襲で焼かれた、小石川の窪町小学校に移ったのです。その時は私の寄宿先も焼け、自転車で内藤部長のお宅へ行って見ましたが、そこも焼けていました。そこで勤務場所であった中野の東京高等学校まで行くとその学校が焼けていて、焼け残った庶務の記録を佐藤勝二さんが一人で整理していました。民事庁舎は焼けなかったのに、苦勞して引越をし、記録を運び出して

やっと整理もつき法廷もこれからという矢先に焼かれてしまったわけです。そういえば法服も全部焼けてしまいましたね。



(旧最高裁判所庁舎)

はどう移って来たのですか。
山口 私は、中野の飯庁舎が戦災で焼けた昭和二十年五月に東京控訴院勤務の辞令ももらったのですが、そのとき東京控訴院は、東京女子師範学校の附属小学校に移っていました。東京控訴院は、大審院庁舎の中にいたの

て大審院や東京刑事地裁と、一緒に戦災に遭い、跡見高女の校舎に移り、そこも焼かれて附属小学校校舎に移っていたのです。

終戦の年の九月に東京控訴院も霞が関に戻ったのですが、庶務と刑事部が当時の刑務協会の建物（現在の日弁連）に入り、民事部は民事庁舎（現在の日弁連）に入りました。昭和二十三年五月に大審院庁舎の修復がきて最高裁がそちらへ移ったので、事務局、刑事部、そのあとへ移り全部一緒になったわけです。その当時の民事庁舎は、現在の五階建てではなく四階の建物で屋上にはバラックができていました。の所に長官室がありました。

終戦後急いで霞が関に戻ってきたのは、進駐軍が来て霞が関の建物を使われてしまうからということもあったようです。戻ってから、米軍の将校が何回か来たことがあり、私は庶務係にいたので応対させられるわけですが、通訳を連れて来ないの大変でした。当時の引越は、荷物の運搬もすべて職員がやり、記録も非常持出袋の中に入れて運ぶのですが、食糧難の時代でしたから、栄養失調でひよひよとしていました。

川上 昭和二十年三月十日の空襲については、川島一郎元東京高裁長官が法曹三百九十七名の旧庁舎の思い出の中で触れられています。元八王子簡裁判事の瀬川誠一さんから聞いた話ですが東京高裁広報誌二百五十号に寄せられています。旧庁舎の話は戦災を抜きにしては語れないですね。
司会 記録などはどうだったのでしょうか。

本間 私は、ちょうど三月十日夜の宿直要員で役所にいたのですが、その日の未明の空襲で焼夷弾が屋根に突き刺さり、上の方から順に燃え出したため、庁舎とともに各室に保管されていた図書や司法研究報告書や司法資料などの白表紙の本が何日も燃え続け、凄惨な姿を呈していたことを忘れることができません。当時は、防空訓練を盛んにやっていたのですが、訓練では三階まで届いた消火栓の水もいざ本番では、あちこちで消火栓を開くものですから水圧が下がってしまい、一階の窓にも届かない有様でどうにもなりません。

山口 大審院の記録は助かっていますね。焼ける少し前に、職員が勤務奉仕で記録を屋根裏から民事庁舎の一階の以前の保全部があった所へ昔の登記所の所ですねーこのコンクリートの上に全部積み上げて置いたからです。

本間 それから、東京区裁の倉庫にも火が入り、中止中の事件記録まで運び出した記憶があります。この焼け方はひどくて、靴の裏がじゅうじゅう焼け焦げる臭いがしますし、上の方からガラスが落ちてたばたばた落ちてくるので、頭の毛がじやりじやり焼けましたね（笑）。

司会 この辺で、建物の周囲の様子について伺いたいと思いますが、皆さんが勤務しておられた頃の司法官衙のあるこの一画は、どんな建物があったのでしょうか。
本間 新庁舎の場所には大審院庁舎があり、戦後最高裁の旧庁舎となっていたわけですが、その北側には赤練瓦で細長い陪審宿舎

があって焼け残り、戦後は東京簡裁の調停に使っていました。その北が司法省で、今も赤練瓦の法務省庁舎となっています。その先の方には司法大臣官舎やテニスコートなどがあったようにも思います。それから、刑事庁舎のあたりは、旧制の府立一中であったという建物があり、戦時中はその一部を拓務省、大東亜省などが使っていました。戦後、木造の東京地裁刑事部の飯庁舎が建てられ、その後本格的な刑事庁舎が建築されているわけです。また、南側の検察庁の合同庁舎と民事庁舎の間には、私立てはないかと思いますが、日比谷小学校という学校があり、その先に東京区裁の建物がありました。

宮崎 東京区裁の建物は、春日町に刑事部が移ってから倉庫となっていたように思います。

本間 法曹会館、刑務協会（今の日弁連）、東弁、一井、二井の会館は今あるとおりですが、法務省の食堂がある建物のあたりには、上席予審判事や検事正の官舎であったという建物があった。それが、予審の宿直に使われていたと思います。

片桐 それから、高裁の車庫のあったあたりには、運転手の人達が住んでいたアパートもありましたね。後のことですが、柳光館などもありました。
本間 そうです。それから、大審院庁舎の真正面の今の人事院は内務省でした。また、外務省は現在の位置にありましたが、当時は、生子堀のある日本風の建物で、確か黒田侯の屋敷と聞いてましたね。なかなか見栄えのする建物でしたよ。

山口 それで、日弁連の建物が刑務協会、その隣にある今は倉庫のようになっているのが司法研究所だったと思います。
司会 ところで、民事庁舎は奇跡的にも焼失を免れて来たわけですが、昭和十年二月に二年三月月かかって完成し、落成式や祝賀会が行われ、記念絵はがきが配られ、一般招待者の見学、職員、家族への公開などが行われたようですが、民事庁舎の建物の構造や外観などで特徴的なものはどうでしょうか。
松本 地下階がないのに地下に水が溜っていましたが……

片桐 それは、防空壕だったからでしょう。確か職員が勤務奉仕で掘ったもので、民事庁舎の建設当初からあったものではないと思います。

本間 私は、空襲警報発令で二、三回ほどそこへ避難した記憶がありますが、樺太球で暗くて気味が悪かったですね。

山口 空襲のたびに逃げ込んでいたのではありません。聞いたところでは、浅かったために爆弾が落ちるとかえって危ないというので、どうせ飛ばされるのなら上にならうが、まだというところだったようですね（笑）。

本間 建物の特徴としては、関東大震災の教訓を生かして耐震性を考え、非常に地震に強い建物に作られていたことですね。廊下の広さは、他の行政官庁と比べても二倍はありました。これは、裁判所には法廷があって当事者等が大勢来庁するので、待合用としても使用できる便利性を考えたからでしょうね。
山口 そうでしょうか。臨時司法制度調査

ます。一カ部に書記と庶各一名、二カ部に一人の簿記書記と給仕がいました。週三回の開廷で書記が二回、簿記書記が一回の一回と準備手続を分担する、という具合でした。それで、裁判官は一部屋を二カ部が使い、四カ部の書記が使っていました。

片桐 ですから、非開廷日の裁判官が登庁しても座る、という機がなくて、一つの机の引き出しを分けて使うなど窮乏な思いをされてしましたね。

本間 事務局も職員数は少なかったですね。庶務が書記以下十名前後、会計も五裁判所会計課とあって、大審院、東京控訴院、東京民事地裁、東京区裁が一つの会計課だったと思います。それで、用紙や用度の物品は司法省の会計課に取りに行ったものです。各裁判所に会計課があるなどとは考えられなかった。それから職員は全般に少なかったように思います。しかも戦争が激しくなるにしたがって出征したり、民間へ転出した人、あるいは軍の要員で南方へ行かれたりする人が次々に出て、人がどんどん減り、そのかわり戦時立法で二審制を採ったり、戦時刑事特別法を作ったりしましたが、大変な時代だったわけて、職員はよく耐えて頑張ったと思います。

片桐 私が春日町の東京区裁庶務にいたころ、男子で雇用の採用がでず、監督書記の命で求人申込みで職業紹介所に行ったのですが、「世話できません」と言われました。そうしたら、所長が警視庁に頼んで、本郷の東大近くの洋裁学校の生徒を動員して採用

したのでした。挺身隊の女子職員として可愛がられたことが、人手不足をこのような方法で補ったことも当時としてはおかしな状況でししたね。

本間 今のうちに研修の制度なんてなく、職員は一種の徒弟制度みたいなもので、先輩の仕事を見習いながら先例となる書式とか慣行なんかを自分で集め、努力して一人前の立派な裁判所書記となり、また、後輩の指導をしてきたのです。

それから記録を大事にしたということは、伝統的なものでね。訴訟記録というものを生命をかける気持ちで大事にしました。今でも大切にしています。今よりもっと大事にしたかも知れませんね。

片桐 調査作成は苦勞でした。家へ持ち帰って夜遅くまで書いたものでね。調査作成に追われていました。

富崎 ほかだつてそうだよ。二・二六事件の時なんか泊まり込みで調査を書いたよ。

片桐 今は速記が速記官が速記録を作る反面録音機を使って細かい供述調査を作っている。それが影響して別面から大変なようだが、刑事は昔も大変だったですね。

司会 新庁舎は、近代設備で、冷暖房完備、完全空調ですが、暖房などはどうだったのですか。

山口 そうですね。民事庁舎になって始めてスチムになったと思います。それまでは法廷も暖房設備だったため、頭が痛くなることがありました。冷房は、裁判官室に扇風機

新庁舎での日々

村重慶一

私の所属する民事通常部は

じゅうたんを敷いた部屋のいすから立ち上がり、緑の日比谷公園、その向こうにビル、遠く東京湾、房総半島の山が見え、眼を左に転すると皇居のお濠が眺められる。新庁舎に移転して以来、白一色の留聲色から新緑へと窓外の景色の変化はすばらしい。二カ部の書記官室

部屋の机の配置も各部の好みに応じて多少の変化がある。同じ部屋でも住人によって趣が変るのは興味深い。

廊下をはさんで研究室が北西部にある。窓からは皇居が一眺の下に見渡せる。朝陽や夕陽が美しく富士がはるかに眺められる日もある。ここに大半の資料が備えてあるが、なければ十八階の資料室に行ってみよう。この研究室からの眺めは霞が関といつてよからう。眼下に法務省の赤煉瓦造りの屋根と青銅が幾何学的模様を呈し（法曹誌上にK氏の写真で紹介する）、お濠を隔てて皇居の緑の屋根やビルが眺められ、その向うにはるか筑波山が見える。大会議室をはさんで南西部に診療室がある。歯科診療室は南西角にあり、ここからの眺めもまたすばらしい。

民事法廷は五、六、七階にある。

五階の単独法廷を使用しているが、控室に当事者を呼び入れて和解することもある。六階の合議法廷はさすがに広く、裁判官席も高く当事者が文書を提出した際に、延べさんが裁判官席に提示するものも大変のようである。当事者席も二重になっている。導向は前の席でしか位置するのが望ましい。大会議法廷は一階にある。地裁民事部三三法廷が使用されたのは今までに予防接續判決の言渡しのみである。

和解室は各部に二カ所ある。そのうち一カ所は、和解の隣りでじゅうたんの部屋である。和解では当事者の控室がなく、各部の入口廊下で当事者が待っている。多いときはこの廊下が一杯になることがある。この前を通るのはいささか閉口する。調停室は三階にあるが、ここは当事者控室が設けられているから、このようなことはないであらう。

地下一階には、郵便局、食堂、理髪室、売店等があり便利である。五時以降食堂でビール、ウイスキー、酒等が利用できるのは好評であるが、昼食時の長蛇の列は困りものである。何らかの合理的方法を考へてもらいたいものがある。時々理髪室を利用しているが、最新の設備を時々、料金も市価にくらべ安く、快適である。

朝出勤してくるとエレベーターの前はラッシュである。中にはまだエレベーターには乗ったことがないという奇特な人もある。専ら

があるだけでしな。新庁舎は近代設備でうらやましい限りですが、維持管理が大変だと思ひます。

本間 裁判所に来る人の服装が変わったということがあります。昔は裁判所に来るには厳格な気持であつたのかも知れないですね。当事者で、裁判、控室など来る人が珍しくありませんでした。被告人は編笠を被って、手錠をつながつた姿を公衆の目に曝されるというところもあつたように思ひます。

片桐 終戦直後アメリカ兵がよく写真を撮らばちばち撮つてましたが、裁判所側とすれば配慮が足りなかったかも知れませんね。

本間 いろいろ話しましたが、司法制度もいろいろと変革しながら、戦前も裁判といふのは、公正で、厳格で独立していたのではないのでしょうか。裁判官もまた職員も裁判の独立ということについては真摯でした。

片桐 それはもう司法部の伝統です。司会 立派な庁舎に入り、建物も大切にしていくなか、先ず各位の案かれたべき伝統を守り裁判所に対する信頼を高めるべく努力していかたいと思ひます。

まだまだお話は尽きないと思ひますが、これだけ座談会を終わらせていただきます。本日は、長時間にわたり有意義なお話をいただき大変ありがたうございます。



非常階段を利用して体を鍛えるわけである。十二階まで二百九十段、十三階まで三百四十四段ある由である。たまには八階までエレベーターを利用し、後は非常階段を歩くこともある。これも体にはよいであらう。エレベーターでは行先を押さるだけで閉のボタンは押さないようにしよう。一押十四、予算節約、エネルギーの節約につとめよう。自動閉鎖装置なのになぜに急ぐ値が数秒を、といいた。

ともあれ、世界一といわれる新庁舎で勤務できるのは幸である。暖房完備の快適な庁舎を与えられ、そろそろ宅調制度も廃止されて来るべきではないかと思はれる。自宅に勤務するよりも庁舎での勤務の方がよほど快適であり、合理的といえるからである。すばらしい庁舎を与えてくださった国民の皆様には深く感謝しながら、負託された裁判事務の重要さを日々かみしめている今日この頃である。

(東京地裁民事二十四部判事)

新庁舎に入つての感想

木村幸好

東京高級、地裁、簡裁の合同庁舎が、中央官庁街である霞が関の元最高裁判所跡に四年九月の工期と建設費四百四十億円をかけて、地上十九階、地下三階（高さ九十二メートル、

長を有する大工・木匠などの高層ビルとして、五月四日卯申七日に竣工の工事が完了した。二五坪半の地に僅け落着床が施された。西山では新庁舎に於て昨年の十月月中旬から牛馬月申旬は納付で、旧庁舎から移転が実施され、其後棟判事部には赤土三郎初旬が約納付期間満了後に移転開始となりたが、新庁舎における執務開始迄延びながら約六ヶ月が過ぎようとするや、その趣意を以つてま記してゐる。この月間の感想を思ひつゞてま記してゐると思ふも、その時々の所感である。

開充室――下階正面玄関中央奥まで下りて、他官庁の建物で眺見られぬ広さとな藝妓があれこれ中々英荷は大尖きに引取られ一段とよき豪華な装束をつけており、一瞬裁判所といふと驚かす程だ。何ではないかと云へば、主君が来た。新庁舎の外構は縁を多く取り、大抵環境を整備し力が注がれていて、私達職員絳々餘裕なく裁縫所交遊的なためにも心細い役割を果すが、以前でしては、その外は、次口門中々中央庭に隣接する、昨年前年後の連陸間敷分館の半仙と山先以前の海濱は、私達が勤初想懐を去置いた魚のものがあったように思ふべきだが、最悪では隣接関係人魚新所並に憤慨半端な若輩当初の過激な論議に解消されているように見受けられます。

さて、私達が毎日執務する刑事部の事務室についてですが、各部職務とも概ねよいスペースがあり、五十坪、十坪とも窓外の眺望も極めて良好であり、細かい点は別として、執務環境としては申し分ないのではないかと思います。

て、新しくアイボリーホワイトと、ブルーの
明い仮面にも塗ち上がった。
旧 最高裁判所の基礎撤去や閣僚庁舎、旧最
高裁判所書庫棟等一連の庁舎解体工事が始まっ
たのは、夏の暑い日盛りのときである。鉄筋
コンクリートを打砕く音、それにもまして、
唸りを上げる機械は、騒動する地響をたてた。
心強く感じはしたが、暑さが厳しい折りのこ
とでもあり、近隣に対する騒音対策に現場の
苦勞は大変なものでした。
建物の解体工事が進むと、今度は静かな掘
削工事へと移っていった。手際よい作業で
工事も順調に進み、現場は日一日と変化して
いく。歳の暮れもあと数日と迫ったとき、本
格的な現場監理体制が始まる。工事を担当す
る宮城県の職員が、現場事務所勤務するこ
とになった。機勢三十余人の職員があらただ
しい引越しをして、その歳が暮れた。
掘削工事から基礎工事、鉄骨工事等へ順次
進み、私が転出した昭和五十六年八月には、
もう大きなタワークレーンが数台立ち上がつ
て、次々に鉄骨を組み立てていた。多分三階
位まで達し上がつていたと思う。
その後の工事も順調で、昭和五十八年十一
月近代技術の粋を結晶させて、重厚にして気
品のある新庁舎が見事に完成された。
工事着工以来四年余に及ぶ長い期間の大工
事であった。その間、無事故であったと聞き
ます。工事関係者等の努力は、並み大抵のこ
とではなかったと思う。
今、この新庁舎で執筆している。なにか縁

ようになった。ロッキード関係の諸事件や連合赤軍関係、成田空港関係、各種爆弾事件関係等社会の耳目を集めている事件の代表的なものである。ところで新庁舎には、一階に四つの特大法廷がある。刑事部第二号法廷はその一つで、高裁刑事事件の使用法廷である。特大法廷で行う事件は、事件の規模、性質、内容、訴訟関係人の数、予想される傍聴希望者の数、司法記者会からの法廷取材要請の内容等、法廷警備上の措置の必要の程度等の諸事情を総合考慮し必要があると認めるとき裁判長があらかじめ長官に使用の申出をする事になっている。本年四月二十七日に、ロッキード関係のうち、被告人に對する判決官渡に、百二号の特大法廷が初めて使用された。前日の二十六日から駐車場に報道陣のテント村も開設され、当日は早朝から報道関係者やその車輛等てこた返すなど、新庁舎になつてはじめての光景であつた。特大法廷には取材記者席が特にセツトされ、時々は折たたみ式の筆記板がつけられ、荷物預り所や、購りの特大法廷百四号には法廷前廊下にゲート式金属探知器も設けられてゐる。一般的に新庁舎の法廷は、傍聴席も従来より多く、法廷のイメージは明るく近代的でゆとりを感じさせる。前記小佐野の事件の際は、傍聴希望者の数とその処理をどうするかが一先問題であつた。傍聴希望者の整理場所とその方法、傍聴券交付方法、傍聴できない人々の整理等を警備関係や庁舎管理関係を検討しながら関係部課と何回となく協議し、

新庁舎あれこれ

太田 武利

私が新庁舎に初めて入つたのは、人事課の引越し予定日である十一月二十二日の約一週間前である。引越し後の机、戸棚等配置の繰引きのためである。新庁舎内は、壁には保護板が取り付けられ、多くの工事関係者がヘルメット姿で働いており、工事現場そのもので新庁舎という感じは余りしなかつたが、一階玄関ホール空間の大きさとエレベーターの多さに完成後の偉容さを感じた。一見思ひであつた。

案内された地裁人事課の部屋は、九階北側の一番奥で松田通りに面していた。部屋に入つてまず、広いなあ、と感じた。狭かつた旧庁舎と対照的である。北側と西側は窓で部屋全体が明るく、北側の窓からは皇居と丸の内界わいが、西側の窓からは最高裁判所をはじめ霞が関官庁街が一望である。数日後にはこの部屋で仕事をすることになるのである。百七十個のコンテナに書類を入れ、二十二日に引越しが始まつた。あらかじめ繰引きのした位置に机、戸棚等が運ばれ、広々とした部屋がにわかに事務室らしくなつた。整理してきた書類を十一階と十二階の倉庫に収納したが、今後の不便が思いやられる。その点を除けば、室内に設置された書類棚のスペースもまあまあであり、ロッキード室内にあつてはなかなか機能的である。各人がロッカーに名札をつけて一段落、新庁舎での勤務態勢が全員の協力のもとにできあがつた。

長年月の使用で汚くなり、狭あひになつた旧庁舎ではあつたが、色々々を思い出さずとももう二度と使用することのない旧庁舎に惜別の念を禁じ得ない。

マイムの鳴るのを聞くのを楽しく待つことにしている。せかせかした気持を捨て、ゆったりとした気持ちでいる。

日に日に新しい什器が入る。地震対策から高さは制限され、部屋を広くとさせている。旧庁舎のことを想うと隔世の感がする。

地下一階の落着いた教養室の広くつた中庭の空間と木の緑、春には山茶花が咲く。新庁舎の特色の一つに多くの樹木を取り入れたことがあげられよう。木の緑は昼のひとときに安らぎを与えてくれる。

更に、地下一階に食堂が三つもできた。色々注文はあろうが、私の要望はほぼ満たしてつてゐる。午後五時から七時三十分の食堂は、ときには貴重な存在となっている。

新庁舎に移つて半年余が経過した昨今、すっかり建物にも慣れた。高裁人事課との打合せもエレベーターに乗ればすぐに済む。まことに便利であるが、場合によっては便利すぎて困ることもある。せいたく言ひ分であることは十分わかつてはいるが、

霞が関官庁街に偉容を誇る立派な建物ができた。これからは立派な建物に恥じない仕事をしなければならぬと思つてゐる。

(東京地裁人事課課長補佐)

近代的な裁判所

森 順一

開け放した窓から、マイクのボリュウムをいばい上げた宣伝カーの音が容赦なく飛び込んでくる。書記官室の隅では、扇風機が首を振つてゐる。腕にタオルを巻き付け、机に向つて調書用紙の白紙部分を一字一字埋めてゆく。汗で字がにじむ。

カンカンカンと音を立てて、法廷にスチーム暖房が入ってきた。証人が聞こえない。法廷は、事実上の一時休庭である。

昭和五十八年十一月、引越した荷物をコンテナに詰めて送り出し、新庁舎に足を踏み入れる。玄関ホールの美しさと広さに驚き、圧倒される。見回しても、見慣れた受付窓口がない。事務室も見当たらない。目につくのは、多数のエレベーターだけである。

エレベーターに乗って、上層階の書記官室に入る。高層ビルは、別にめづらしくはないが、地上十六階で仕事をするのは初めてである。送り出したコンテナも山積みになつていて、何となく落ち着かない。窓の外を眺めると、いつもの見慣れた風景と全く別の風景が見える。

近代的な庁舎での勤務が始まつた。まだ私の裁判所、私の書記官室という感じはない。エレベーターを降りて、私の書記官室を捜すが見当たらない。私の書記官室はどこでしょう。裁判室では、ある裁判官が椅子に深く腰を下ろしたとたん「あなたの部屋は、です。」と声をかけられる。

法廷も始まつた。扉を開けると、静まり返つた法

北口エレベーターホールで九階行きのエレベーターを待つ間、ランパの点滅がいかに近代的な感じである。従前のエレベーターと異なり、今どの階にエレベーターがいるのかわからないどころか、さがあるのか、なかなかエレベーターがこない。と不満を口にすると、エレベーターが演員通過することはない。ランパのついたエレベーターは必ず止まる。また、コンピュータで一番効率よくエレベーターが動いているとも聞く。こんな素敵なシステムを取り入れるとは裁判所もやるもんだ、と思つた。それからは、キンコン、というチ

延に照明がまぶしい。いつもの代理人の顔も遠つて見える。初めて法廷に立ち会つたときのような緊張感が走る。代理人が、机の上に設置された真新しいマイクを指して弾き、性能のテストをしている。マイクを握りしめ、カラオケでも歌う格好の御仁におられる。

新庁舎での出来事に話題は尽きない。午後五時過ぎ、夜景を見ながら、これからの新庁舎での生活を想い、一杯くみ交す。酒の肴は少ない。

新庁舎に移つて、早や六か月が経つた。書記官室の隅に置かれていた扇風機はなくなり、腕に巻かれていたタオルもなくなつた。法廷に響くのは、感度のよいマイクを通してくる証人の声とメモを取る音だけである。近代的な庁舎で何となく自由なく、机に向つて調書用紙の白紙部分を一字一字埋めてゆく。

新庁舎は、まさに世界に誇るべき近代的な庁舎である。その庁舎から、私達の先輩が大量に去られる時代がやって来る。先輩達が残されたものを受け継ぐのは、私達の責務である。あとは、近代的な庁舎にふさわしい裁判所とは、国民にとっての近代的な裁判所とはどのようなものか、裁判所書記官として、何をすることができようかを考え、それを行動に移すことが、近代的な庁舎を与えられ、そこに残る私達の課題であると思ふ。

(東京高裁第七民事部書記官)



(全 景 暮 色)

編集後記

手元の高裁広報誌のつづりを試みにひも
いてみました。

新庁舎に関する記事の第一報は、同誌の第
二百二十九号（昭和五十二年三月一日発行）
にまでさかのぼります。それは、最高裁旧庁
舎跡地の地下工作物の撤去及び設計関係の費
用が昭和五十二年度の予算案に計上されたこ
とを報じています。以後、新設された管理課
についての記事まで含めると、工事の進ちょ
く状況、工事にまつわる話、新庁舎Qアンド
Aなど変化に富んだ内容の記事が、時には写
真入りで同誌の二百七十号（昭和五十九年三
月一日発行）までの間、実に十六回も掲載さ
れています。

たった一段の小さな開き記事である第一報
が長年の夢と期待を凝縮した新庁舎の一粒の
種子であるなら、続報は新庁舎の成長過程を
表わすといえるでしょう。そして、この度、
式辞、祝辞を始め、その種子を幾星霜にわた
りはぐくんで来られた関係者の方々から数々
の玉稿をいただきました。また、温故知新、
旧庁舎時代をしのぶ座談会も編集することが
できました。これらの御協力がなければ、こ
の記念号の発行もできなかったでしょう。ま
さに大輪の花を見る思いです。御多忙であ
るにもかかわらず執筆の依頼を快くお引き受
けくださった方々、座談会に御出席くださ
った方々に厚くお礼申し上げます。

花は実を結ぶものと信じます。編集者一同、
新庁舎が永遠に緑のみずみずしい大木として
成長することを願ってやみません。